

2026 Vol.

78

京大薬友会誌

CONTENTS

会長挨拶

人事異動と受賞報告

藤井信孝先生追悼記事

退任挨拶

就任挨拶

研究科長賞

奨学金授与報告

お食事探訪

研究室訪問

薬学の未来を考える京都シン

ポジウム・生涯教育講演会

産学合同博士発表交流会

薬友会スポーツ大会

学位授与者

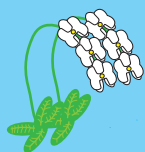
会員便り

寄付御礼とお願い

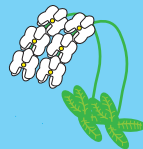
部報

編集後記





会長あいさつ



薬友会会長 山下 富義



京大薬友会会員の皆様には、平素より京都大学薬学部・薬学研究科ならびに薬友会の活動に格別のご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

このたび、私こと、竹本佳司先生の後任として、本年4月に薬学部長・薬学研究科長を拝命し、併

せて薬友会会長に就任いたしました。重責に身の引き締まる思いをしています。私は1988年に本学薬学部を卒業し、1991年に助手に採用されて以来、今日まで京都大学薬学部・薬学研究科で教育研究活動に取り組んでまいりました。これまでを振り返り、自由闊達な薬学の気風や、これを支えてこられた多くの先生方、卒業生、在学生の皆様の存在の大きさを強く感じております。

さて、本年3月末に、加藤博章先生、竹島浩先生、竹本佳司先生の三名が定年退職されました。長年にわたり本研究科の教育・研究を牽引し、多くの人材を育ててこられた先生方に、深く敬意と感謝を表します。3月7日、14日、19日に行われた最終講義では、先生方の研究への熱い思いに触れ、深い感銘を受けました。また、名誉教授の先生方をはじめ、多くの卒業生にもご参加いただきました。厚く御礼申し上げます。

一方、基幹講座には新たに3名の教授をお迎えしました。昨年10月にオルガネラ情報学分野に関根史織先生、本年4月に構造生物薬学分野に小川治夫先生、薬品機能解析学分野に津川裕司先生が着任されました。協力講座では、昨年10月に化学研究所の今西未来先生が教授に昇任され、ご継続いただいているほか、本年6月からは医生物学研究所の中台枝里子先生にも新たにご担当いただいています。

若手教員の異動も数多くありました。津田真弘准教授、白川久志准教授、柳川正隆准教授の教授ご栄転や、新たな准教授、講師、助教の採用も進み、女性教員比率は32%、若手教員（40歳未満）比率は44%に達しています。多様な人材と新しい世代の力により、本研究科の教育・研究が一層活性化することを期待しています。

京都大学は、本年7月、国際卓越研究大学として認定されました。自由の学風を基盤に、世界から多様な研究人材が集う知の拠点を形成し、独創的な研究成果を社会的価値へとつなげることを謳っています。その体制強化の柱が、デパートメント制の導入です。研究組織体制を部局小講座から学術領域を基盤とするデパートメントへ再編し、オープンな研究環境と充実した支援体制を整えることで、研究力のさらなる強化を目指します。この全学的な流れの中で、我々は、基礎薬学から創薬、医療、社会実装へと至る様々な研究を推し進め、優れた人材を社会に輩出していきたいと考えています。

京大薬友会では、昨年11月1日に第11回薬学の未来を考えるシンポジウムを開催しました。「創薬力強化に向けた未来戦略」をテーマに、人材育成、医療分野における国家的な産業戦略、アカデミア連携について活発な意見交換を行い、薬学が社会に果たすべき役割を考える貴重な機会となりました。今年は、4年に一度の生涯教育講演会を、10月31日（土）、TKP 東京駅カンファレンスセンターで開催します。「変化を力に～私たちが選んだキャリアの道～」をテーマに、将来を見通しにくい時代に、講師の皆様がどのように自らのキャリアを選び、築いてこられたのかをお話いただく予定です。変化の激しい時代だからこそ、世代や分野を超えて学び合い、励まし合う同窓のつながりが一層大切だと思います。参加者の皆様とともに、これからの夢や目標、薬学人としての歩み方を語り合う場になればと期待しています。

今後とも、京都大学薬学部・薬学研究科が、自由で独創的な研究を実践し、社会に貢献する薬学人材を育成・輩出し続けられるよう、力を尽くしてまいります。会員の皆様には、引き続き温かいご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様のますますのご健勝とご活躍を心より祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

薬学研究科人事異動 2025.8.1～2026.8.31				
採用・昇任等				
職名	氏名	分野名	発令年月日	備考
准教授	ROBERT, Martin	システム微生物学	2025年8月1日	システム微生物学 特定准教授より
教授	関根 詩織	オルガネラ情報学	2025年10月1日	University of Pittsburgh Assistant Professor より
教授	今西 未来	生体機能化学(協力講座)	2025年10月1日	生体機能化学 准教授より
特定助教	田渡 司	薬品合成化学	2025年11月1日	Rice University 博士研究員より
特定助教	西田 紘士	生体分子計測学	2025年10月1日	
講師	黒田 悠介	薬品合成化学	2025年12月1日	創薬プロテオミクス 特定助教より
准教授	平 大樹	臨床薬学教育	2026年2月1日	医療薬剤学 講師より
教授	小川 治夫	構造生物薬学	2026年4月1日	構造生物薬学 准教授より
教授	津川 裕司	薬品機能解析学	2026年4月1日	東京農工大学 教授より
准教授	関根 悠介	オルガネラ情報学	2026年4月1日	University of Pittsburgh Assistant Professor より
助教	大塩 聖	オルガネラ情報学	2026年4月1日	学習院大学より
助教	劉 晨晨	薬品機能解析学	2026年4月1日	
助教	蕭 穗文	システムバイオロジー	2026年4月1日	システムバイオロジー 博士研究員より
特定准教授	岸本 真治	【寄附講座】シン・分子社会学	2026年4月1日	
特定助教	安高 理裕	【寄附講座】シン・分子社会学	2026年4月1日	
助教	山下 英理華	薬剤設計学	2026年5月1日	
教授	中台 枝里子	老化感染制御学(協力講座)	2026年6月1日	
助教	谷本 佳彦	老化感染制御学(協力講座)	2026年8月1日	
助教	岡畑 美咲	老化感染制御学(協力講座)	2026年8月1日	
退任等				
職名	氏名	分野名	発令年月日	備考
教授	伊藤 貴浩	がん・幹細胞シグナル学(協力講座)	2025年8月31日	
助教	村上 翔	精密有機合成化学(協力講座)	2025年9月30日	
助教	河野 健一	薬品機能解析学	2025年9月30日	広島大学へ
准教授	津田 真弘	臨床薬学教育	2025年10月31日	福井大学へ
教授	加藤 博章	構造生物薬学	2026年3月31日	
教授	竹島 浩	生体分子認識学	2026年3月31日	
教授	竹本 佳司	薬品分子化学	2026年3月31日	
准教授	白川 久志	生体機能解析学	2026年3月31日	大阪医科薬科大学へ
助教	木瀬 亮次	生体機能解析学	2026年3月31日	筑波大学へ
助教	田中 陽一	システムバイオロジー	2026年3月31日	
産学共同講座教員(教授)	嶋田 裕	産学共同講座: ナノバイオ医薬創成科学	2026年3月31日	
産学共同講座教員(教授)	信正 均	産学共同講座: ナノバイオ医薬創成科学	2026年3月31日	
産学共同講座教員(教授)	米原 伸	産学共同講座: ナノバイオ医薬創成科学	2026年3月31日	
特定教授	秋山 英雄	産学共同講座: ナノバイオ医薬創成科学	2026年3月31日	
特定助教	岸本 純	産学共同講座: ナノバイオ医薬創成科学	2026年3月31日	
特定助教	妙本 陽	産学共同講座: ナノバイオ医薬創成科学	2026年3月31日	
准教授	柳川 正隆	シグナル薬理学(旧: 生体機能解析学)	2026年6月30日	理学研究科へ
受賞歴 2025.08.23～2026.07.01				
氏名	分野	受賞年月日	受賞名	
上野雅晴	1969年学部卒	2025年8月23日	正四位 瑞宝中綬章(死亡受勲)	
小形公亮	生体分子計測学	2025年9月16日	クロマトグラフィー科学会 奨励賞	
高山亜紀	薬品合成化学	2025年9月22日	学術変革領域「デジタル有機合成」レクチャーシップアワード 2025	
金尾英佑	生体分子計測学	2025年9月25日	日本分析化学会 奨励賞	
中島一磨	病態機能分析学	2025年11月15日	第22回日本核医学会研究奨励賞	
平大樹	臨床薬学教育	2025年12月5日	2025年度 臨床薬理研究振興財団賞学術奨励賞	
池田拓慧	システムケモセラピー・制御分子学	2026年1月16日	日本薬学会関西支部奨励賞	
有地法人	創薬有機化学	2026年1月16日	日本薬学会関西支部奨励賞	
中川俊作	医療薬剤学	2026年2月22日	日本臨床疫学会 令和七年度データベース研究賞	
秋葉宏樹	創薬有機化学	2026年3月20日	日本化学会 第40回若い世代の特別講演証	
川口祥正	生体機能化学	2026年3月26日	2026年度日本薬学会奨励賞	
小形公亮	生体分子計測学	2026年3月28日	令和8年度 日本薬学会物理系薬学部会 奨励賞	
黒田悠介	薬品合成化学	2026年4月1日	UBE学術振興財団 第66回学術奨励賞	
川口祥正	生体機能化学	2026年4月15日	化学情報協会JAICI賞	
秋葉宏樹	創薬有機化学	2026年5月9日	Antibody Therapeutics Paper of the Year 2025	
黒田悠介	薬品合成化学	2026年6月1日	新化学技術推進協会 第15回新化学技術研究奨励賞	
重面雄紀	医療薬剤学	2026年6月27日	NPPR Reviewer Awards 2026	
掛谷秀昭	システムケモセラピー・制御分子学	2026年7月1日	2025年度 日本がん分子標的治療学会 鶴尾隆 賞	

藤井信孝先生を偲んで

京都薬科大学前学長・名誉教授 赤路 健一



京都大学名誉教授藤井信孝先生は、令和 7 年 12 月にご逝去されました。享年 75 歳でした。先生のあまりに早い訃報に接し大変残念で哀切の念に堪えません。先生と直接お話しすることで新しい発想を学べることを楽しみにしていました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

藤井信孝先生は、昭和 48 年 3 月に京都大学薬学部を卒業され直ちに同大学院薬学研究科修士課程ならびに博士課程に進学されました。博士課程 1 年目の昭和 50 年 10 月に京都大学薬学部助手に着任され、昭和 55 年 11 月に京都大学薬学部助教授、平成元年 4 月には 30 代の若さで京都大学薬学部教授に昇任されました。教授として新たな研究領域に果敢に挑戦され、多くの独創的な研究成果を発表されて来られました。同時に大学運営に関わる多くの重職を歴任して来られました。平成 18 年 4 月から平成 20 年 3 月まで京都大学薬学部薬科学科長、平成 20 年 1 月から同年 9 月まで京都大学薬学研究科長・薬学部長・薬学部総合薬学科長、平成 20 年 4 月から同年 9 月まで薬学研究科附属統合薬学フロンティア教育センター長、平成 20 年 1 月から平成 22 年 9 月まで京都大学経営協議会委員、平成 20 年 10 月から平成 22 年 9 月まで京都大学理事(副学長)・京都大学教育研究評議会評議員を務められました。また、全学共通教育委員会、国際交流委員会、財務委員会をはじめ数多くの学内委員として薬学部・薬学研究科のみならず京都大学の運営と発展に尽力されました。学外においても、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員や日本薬学会医薬化学部会長、ペプチド学会理事・副会長、など数多くの役職を務められました。

藤井先生は、世界におけるペプチド・蛋白質の化学合成に関する基礎研究をリードしながら、これらを基盤とした非水解性ペプチド等価体の合成法開発や新しい複素環合成法に基づく独創的な医薬品化学研究の分野で極めて大きな業績を挙げられました。多様な研究成果の中でも、恩師矢島治明先生の学士院賞受賞対象研究となった酵素蛋白質リボヌクレアーゼ A の液相法による全合成、ペプチド結合の

重要性に着目した各種ペプチドミメティクスの化学合成法の開発と医薬品化学への応用などが白眉研究と言えます。さらに、京都大学薬学研究科における古くからの合成研究で蓄積された化合物の医薬シーズとしての有効活用に向けたライブラリー化に尽力されるとともに、最新の化学合成技術により得られる新規複素環化合物をリード化合物とする各種酵素阻害剤や抗 HIV 活性を有する新規複素環化合物の創出に成功されました。これらの研究成果は、有機化学・医薬品化学研究の領域のみならず、生物学や生理学の基礎研究に携わる国内外の多くの研究者から高い評価を受けています。昭和 58 年 4 月には「有機スルホン酸脱保護法によるペプチドの合成研究」により日本薬学会奨励賞を、平成 25 年 11 月には「ペプチド・蛋白質化学を基盤とする創薬研究」により日本ペプチド学会賞を、さらに平成 28 年 3 月には「ペプチド・蛋白質科学、複素環化学を基盤とする創薬研究」により日本薬学会賞を受賞しておられます。

藤井先生はその類い稀な独創性と感性に基づき、極めてユニークな研究室を作り上げられました。上記した多様な研究成果は、藤井先生のとんでもない速さで回る頭脳から湧き出した発想の賜物ですが、同時に多くの都市伝説が生まれました。今から思うと、これら都市伝説の殆どは藤井先生の深い考察に基づく実験の巧みさから生まれたものだと私は理解しているのですが、当時はそこまで気がつかなくて伝説として代々伝えられてきたのであろうと思っていました。また、藤井先生はその研究室運営の間に、様々な研究領域で活躍する多くの若手研究者を育てられました。当時を思い返すと、多くの後輩が藤井先生をロールモデルとして自分自身を振り返る環境を作っていただいた結果であったと感じています。現在、そうして育った研究者が中堅さらには重鎮研究者に成長し次の世代の研究者育成に努めています。京大薬学部薬品製造学研究室の DNA が世界中に広がっているのです。

藤井先生の斬新でユニークな発想と見解をこれからも折に触れて伺えるものと思っておりましたのに、先生のあまりに早いご逝去に驚き深い喪失感を覚えています。藤井先生の長年にわたる温かいご指導にあたためて深く感謝し、謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。本当に残念です。

退任あいさつ

前構造生物薬学分野教授 加藤 博章

2026 年 3 月 31 日をもちまして、無事に定年退職いたしました。ひとえに関係各位のお力添えのおかげと、厚く御礼申し上げます。また去る 3 月 7 日には最終講義と記念祝賀会を設けていただき、多数の方にご出席いただきましたこと誠にありがとうございました。

私は 2002 年 4 月、薬学研究科に新設された構造生物薬学分野へ教授として着任いたしました。以来 24 年間にわたり、学術研究とそれを礎とした教育活動に邁進してまいりました。微力な私が今日まで職を全うできたのは、教職員の皆様の温かいご支援、研究室スタッフの献身的な協力、そして何より学生諸君の真摯な努力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

京大農学研究科農芸化学専攻（現 応用生命科学専攻）で学位を取得した私にとって、まさか薬学へ着任するとは予想もしておりませんでした。酵素が示す基質特異性と反応加速能力に魅せられ、そのメカニズムを解明したい一心で目の前の課題に没頭してまいりました。反応速度論、タンパク質科学、分子生物学、X 線結晶学と必要な手法を順次修得し挑戦を重ねたことで、結果として探求する疑問の難易度を高めていくことができたように思います。

振り返れば、2つの大きな要素が私の歩みを支えてくれました。

1つ目は「人との出会い」です。京大博士後期課程へ編入した際、同級生には専攻一の秀才である平竹潤氏がおり、目標であり議論の相手として共に学究生活を送れたことは何事にも代えがたい経験でした。学位取得後に助手に採用され、文部省の在外研究員として Brandeis University へ時間分割 X 線結晶学の習得に赴いた際には、Ilme Schlichting 博士（現 Director, Max Planck Institute for Medical Research）と知己を得ました。彼女は当時 Ras-p21 の時分割解析で『Nature』誌に論文を発表したパイオニアであり、論文だけでは知り得ない解析の極意を教えてくださいました。その後も共同研究や学会企画等を通じ、私が国際的な研究コミュニティへ貢献できるよう長年支援してくれました。帰国後、その縁を通じて、彼女の恩師 Kenneth Holmes 教授の弟子であり当時松下国際研究所長であった前田雄一郎先生とお会いしました。前田先生が藤吉好則先生と構想された理化学研究所播磨研究所

（RIKEN/SPring-8）のプロジェクトへ速度論的結晶学チームの PI として参画する機会をいただき、1999 年に自身の研究室を立ち上げることができました。破格の環境で前人未到のテーマに取り組めたことは大きな転機となりました。

もう 1 つは「基盤技術の劇的な変革」です。半導体の革新とコンピューターの発達が大規模計算を可能にし、同時期に欧米や日本でシンクロトロン放射光施設が建設され超高輝度 X 線が利用可能となりました。さらに構造生物学研究へ重点的に資金が投じられたことで優秀な人材が集まり、志の高い研究コミュニティの中で活発な交流を実現できたことは極めて幸運でした。こうした技術革新に後押しされ、最前線で未解明の課題に挑み、世界中の研究者と切磋琢磨できたことに深く感謝しております。

おかげさまで RIKEN/SPring-8 時代に立ち上げた「ホタル発光色の制御メカニズム」、「ペルオキシソームへのタンパク質輸送メカニズム」、そして「P 糖タンパク質（ABCB1）の立体構造」の研究は、薬学研究科の在職中に大きな成果として実を結びました。

2026 年 4 月からは教育改革戦略本部にて特定教授を務めております。これからは全学共通教育ならびに教育改革の推進に微力を尽くして参る所存です。今後ともなお一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。最後になりましたが、京都大学薬学部・薬学研究科および京大薬友会の益々の発展を心よりお祈り申し上げ、退職のご挨拶とさせていただきます。



退任あいさつ

前生体分子認識学分野教授 竹島 浩



私は 2026 年 3 月末に定年退職しました。当該分野の学部講義担当は生物学基礎科目であり、着任した 2006 年より主に新入生向けの全学共通科目の生物学導入講義を受け持つことになりました。着任以前には医学部薬理

学と医化学の担当経験しかなく、稚拙な内容の講義とはいえ、他学部を含む履修学生に興味を持ってもらうために当初悪戦苦闘を強いられたことが思い出されます。さらに、学部学生の就学状況の分析からは、物理受験入学者の生物系科目の成績は相対的に低迷しており、生物学系研究室配属率も極端に少ないと指摘されていました。その改善を目的に、生物系教員からは生化学のみならず、解剖学や生理学の基礎も導入講義で丁寧に解説せよと要望されました。前任者の講義コースで利用されていた教材には高等学校の生物で解説される解剖学と生理学の基礎事項の解説がなく、他大学で採用されていた数種類の入門教科書を取り寄せましたが、適当なものはありませんでした。そのため、出版社の支援を得て新たな教材制作に着手し、2008 年に「基礎生命科学」(京都廣川書店)を出版しました。数年後に行われた就学状況分析においても物理受験入学者の生物学指向面での改善が示唆されずに落胆しましたが、その後改訂を繰り返して他大学医歯薬系学部での生物学導入教材としても利用されていることは嬉しい限りです。一方、学部専門実習の担当では従来の酵素反応の学習項目をそのまま踏襲しました。担当教員交代に伴い内容が刷新されて、近年では薬学部教育色がかなり薄れてしまった生物系専門実習コースの中で、最後まで生化学の基盤となる内容を変更することなく実習担当を終えたことに安堵しています。専門実習担当を支えてくれた歴代の研究室所属大学院生の多大な

尽力に対して、この場を借りて御礼申し上げます。

大学院博士課程において小胞体 Ca^{2+} 放出チャネルであるリアノジン受容体のクローニングを手掛けて以来、小胞体 Ca^{2+} 放出の分子機構は私の主要な研究課題となりました。リアノジン受容体は興奮性細胞に分布し、一般的には細胞膜の電位依存性 Ca^{2+} チャネルと共役して開口します。この機能共役は細胞膜と小胞体膜が近接する結合膜構造内に両 Ca^{2+} チャネルが共局在することで成立します。ジャンクトフィリンは小胞体膜貫通セグメントを有し、細胞膜リン脂質と相互作用することにより結合膜構造を構築します。また、微小閉鎖空間である小胞体からの生理的な Ca^{2+} 放出が成立するためには、カウンターイオンによる膜電位の安定化が必要であると推定されます。TRIC チャネルは小胞体や核膜に分布する一価陽イオン透過性チャネルであり、さまざまな細胞系でカウンター K^{+} 動態の一翼を担うことで小胞体 Ca^{2+} 放出を支援すると考えられます。リアノジン受容体、ジャンクトフィリンおよび TRIC チャネルなどの小胞体 Ca^{2+} 放出関連タンパク質群を分子同定して、それらの生理機能をノックアウトマウスの利用により解明できたことについては多少の達成感はありませんが、まだまだ究明すべき課題が山積している現状については残念に思います。手掛けてきた研究の詳細については、最近取りまとめた総説(日本生化学会誌 vol. 96, pp. 25-35, 2026)を参照いただければ幸いです。約 40 年間の多様な研究活動の中で共に働いた国内外の共同研究者には深謝致します。また、上述の講義や実習を履修した卒業生、とりわけ当該分野で博士取得後アカデミック研究領域にて奮闘中の若干名の卒業生には、益々の御活躍と御健勝を祈念しております。

退任あいさつ

前薬品分子化学分野教授 竹本 佳司

京大薬友会のご支援のもと、3月19日に最終講義を開催し、2025年3月末をもって無事に定年退職いたしました。ご多忙のなか最終講義にご出席いただいた皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

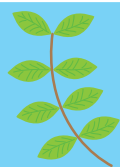
私は1998年2月、薬品分子化学分野（井深俊郎教授）の助教授として着任して以来、28年間にわたり薬学研究科でお世話になりました。研究面では、生物活性天然物、多環式複素環化合物およびキラル分子の合成研究に取り組んできました。2000年に教授に昇進した頃は21世紀の幕開けを目前に控え、「元素戦略」や「環境調和」が化学分野の重要なキーワードとなっていました。その流れを受け、研究の軸足を徐々にグリーンケミストリーへ移し、とりわけ「希少金属を用いず、資源豊富な元素のみを利用した有機触媒の開発」に注力しました。医薬品であれ試薬であれ、この世にまだ存在しない優れた機能性分子を自ら創り出すことは、有機合成化学者にとって最も魅力的な挑戦です。有機触媒の設計にあたり、範としたのが生体酵素でした。酵素は、合成触媒ではいまだ実現できない反応を、常温・中性条件下で基質選択的に進行させる理想的なグリーン触媒です。その触媒作用を有機化学的に再現することで作用機序を解明するとともに、酵素を凌駕する人工触媒を創製したいという思いから研究を開始しました。酵素のような多点相互作用を触媒作用部位に取り入れた新規触媒の設計は、私にとって大変魅力的な研究課題でした。しかし、数多くの候補触媒を実際に合成する共同研究者にとっては、大変な作業であったと思います。失敗も少なくありませんでしたが、試行錯誤の末に予想外の大きな発見につながることもありました。打率に例えれば3割程度だったかもしれませんが、成功の喜びを全員で分かち合うことで、次の挑戦への原動力になったのではないかと思います。私の思いつき（妄想）を形にし、打率3割を実現するため日々研究に励んでくれた学生諸君には感謝の念しかありません。一方で、触媒候補を一つひとつ手で合成する煩雑さのため触媒作用部位の設計に注力するのが精一杯で、触媒活性と基質認識能を兼ね備えた超酵素型人工触媒の創

製には至りませんでした。対照的に、生体酵素は遺伝子改変によって構造改変がより簡便なため、その研究分野は「合成生物学」として大きく発展しました。酵素に迫るところか、ますます引き離された状況です。退職までに酵素を超える人工触媒の精密設計は叶いませんでしたが、今後は合成ロボットや人工知能を活用することで、合成生物学的手法を超えることも可能です。ぜひ次世代の研究者に実現していただきたいと願っています。

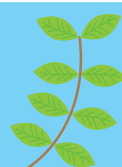
さて、京都大学という恵まれた環境のもとで研究室を主宰できたことは、私の人生における最高のギフトでした。優秀なスタッフを迎え入れることができ、何より毎年、優秀で個性豊かな学生たちが研究室に加わってくれたことが、研究室に活力と成長を促してくれました。この間、10名のスタッフと研究活動を共にし、29名の博士学位取得者を輩出したことが私にとって大きな喜びであり、かけがえのない財産です。これまで薬学の分野に身を置きながらも、純粋に化学を追求する研究人生を歩んできました。今振り返れば、自分のわがままを通して教育と研究に携わることができて本当に幸運でした。その一方で、化学系薬学の意義や役割は確実に変化しつつあります。とりわけデパートメント制の導入が予定されている京都大学においては、他大学に先駆けて薬学独自の研究ディシプリンを確立していく必要があるように感じています。

最後になりますが、在任中に賜りましたご厚意に改めて深く感謝申し上げますとともに、皆様のご健勝とご多幸、そしてますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。





就任あいさつ



疾患分子制御学分野教授

木村 寛之



2025 年 6 月より、薬学研究科協力講座「疾患分子制御学分野」を担当させていただきますことになりました木村寛之と申します。本紙面をお借りして、京大薬友会の皆様に自己紹介と就任のご挨拶を申し上げます。

私は 2003 年に京都薬科大学大学院修士課程を修了後、京都大学大学院薬学研究科博士後期課程へ進学し、恩師である佐治英郎名誉教授のご指導のもと、放射性医薬品の開発や分子イメージング技術の創薬への応用に取り組み、博士号を取得いたしました。薬学研究科での日々は、研究者としての基盤を築いたかけがえのない時間であり、自由闊達な議論や異分野の研究者との交流を通じて、薬学の魅力と可能性を深く学びました。

学位取得後は、薬学研究科で産学官連携研究員、産学官連携助教、特定助教を務め、放射性医薬品の創製や分子イメージング研究を推進しました。2011 年には京都大学放射性同位元素総合センター助教として、PET/SPECT/CT、MRI、蛍光・発光イメージング装置を備えた分子イメージング研究基盤の整備に携わるとともに、研究支援と放射線安全管理に従事しました。その後、2015 年には京都薬科大学准教授、2023 年には金沢大学教授を経て、このたび再び京都大学へ戻る機会をいただきました。研究者として育てていただいた京都大学に、教育・研究を通じて貢献できることを大変光栄に感じています。

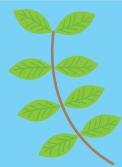
私の専門は、放射性同位元素（RI）を利用した分子イメージングと放射性医薬品の研究開発です。近年、診断と治療を一体化した「ラジオセラノスティクス」が世界的に注目され、薬学が果たす役割はますます重要になっています。私はこれまで、分子プローブの設計・合成から薬理評価、放射性核種の標識、動物を用いた

前臨床評価、さらには臨床研究まで、一連の創薬研究に取り組んでまいりました。また、医療用ラジオアイソトープの製造技術や安定供給体制の構築にも力を注ぎ、診断薬・治療薬の社会実装を見据えた研究を進めています。

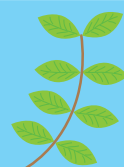
放射性医薬品の開発は、薬学だけでなく、医学、工学、理学、原子力科学など多様な分野との連携によって成り立ちます。京都大学には、部局や研究科の垣根を越えて自由に議論し、新たな研究へ挑戦できる文化があります。私自身も、多様な分野の研究者と共同で、次世代イメージング装置の開発や放射性医薬品の創製など幅広い研究に取り組んできました。こうした京都大学ならではの総合力を生かし、世界を先導する放射性医薬品研究の発展に貢献したいと考えています。

今後は、環境安全保健機構教授として学内の放射線利用環境の整備と安全管理を担うとともに、薬学研究科協力講座の教員として、RI の製造から放射性医薬品の開発、前臨床評価までを一貫して実施できる研究基盤の充実を目指します。また、国内外の研究機関や企業との連携を推進するとともに、次世代を担う人材の育成にも力を尽くし、京都大学における放射性医薬品研究のさらなる発展に貢献してまいります。

まだまだ未熟ではございますが、京大薬友会の皆様には今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



就任あいさつ



生命量子分析学研究分野教授 天満 敬

2025 年 6 月より協力講座として生命量子分析学研究分野を担当させて頂くことになりました複合原子力科学研究所の天満敬と申します。京大薬友会会員の皆様に、本誌面をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は 1996 年に京都大学薬学部に入學し 4 回生で病態機能分析学分野に配属されて以来、大学院生・助手・助教の時代まで約 15 年間、佐治英郎先生にご指導を賜りました。同じ滋賀出身のため勝手にシンパシーも感じておりましたが、佐治先生からは放射性医薬品研究の面白さや新しい研究領域を切り拓く重要性だけでなく、誰に対しても丁寧かつフレンドリーで傾聴を大切にする姿勢を間近で学ばせて頂き、そこで得た研究への向き合い方、人との向き合い方は、私のかけがえのない財産となっております。私がこの研究領域に強く惹かれたきっかけは、学部時代に内用放射線療法を学んだことでした。講義を通して生体内分子の相互作用ネットワークの精緻さを学び、創薬の難しさに打ちのめされていた頃、放射性ヨウ素を甲状腺がん届け放射線の物理的エネルギーで病巣を破壊するという発想に触れ、分子ですらない核種そのものが薬になるという事実大きな衝撃を受けました。体内においても物理の力で病変に対峙できる薬学の奥深さを知ったことが、私の研究の原点となっております。院生当時、研究室にはアカデミアへ進まれる先輩方が多く、私も自然と研究の道を選び、博士課程途中から助手に採用して頂きました。就職氷河期時代だったことも影響してか同期のアカデミア率もとても高く、困ったときに各所で活躍する先輩や同期に相談できることを、たいへん恵まれたことと感じております。

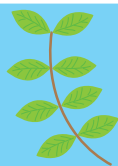
京大薬を離れた後は、国立循環器病研究センター研究所画像診断医学部に移りました。学位テーマでもあった ^{15}O -gas PET の臨床診療に継続的に関わる機会を得て、核医学・画像診断が実際の医療にどのように貢献しているのかを実感しました。また、国循では飯田秀博部長のご指導のもとトゥルク PET センターと密な共

同研究を行い、フィンランドで湖畔のサウナを体験させて頂いたことも含め、硬軟織り交ぜて国際共同研究の面白さを学びました。2017 年からは大阪薬科大学（2021 年から大阪医科薬科大学）で研究室を主宰し、BNCT 研究を始める切っ掛けを得

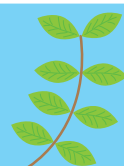


たことが大きな転機となりました。それまでの研究は放射性医薬品や分子イメージングを基盤とした診断研究が中心でしたが、BNCT では治療薬としての薬剤設計や、診断と治療を一体で考えるセラノスティクスの重要性を強く意識しました。また、薬剤師教育に携わる中で、研究成果の社会実装には、医療現場を担う人材の育成や、核医学・放射線を理解する裾野の拡大が不可欠であることも学びました。2025 年からは複合研で放射性医薬品と BNCT 薬剤の創薬研究に取り組んでおります。常に壊変する放射性核種か、中性子刺激により生成核・反跳核を生じる安定核種か、いずれも薬効の中心に核種が位置している点で共通しており、これらを核種創薬と捉え研究を進めています。複合研の原子炉や加速器を備えた特色ある環境を生かし、放射化学を基盤として放射性薬品化学・核医学・放射線医学へ展開する医療実装を見据えた核種創薬研究を進めてまいります。

京大薬で育てて頂き、この度再び薬学研究科の研究・教育に関わる機会を頂きましたことを大変光栄に感じております。微力ではございますが、薬学研究科の研究と教育の発展に少しでも貢献できるよう努めてまいります。京大薬友会会員の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



就任あいさつ



オルガネラ情報学分野教授 関根 史織



2026年4月1日より、京都大学大学院薬学研究科において、オルガネラ情報学分野の教授に着任しました、関根史織（せきねしおり）と申します。

私は、東京大学大学院薬学系研究科の一條秀憲先生（現・東京科学大学特別栄誉教授）のもとで学び、2011年に博士号を

取得しました。博士課程では、准教授でおられた武田弘資先生（現・長崎大学教授）が発見されたミトコンドリア局在の新規脱リン酸化酵素の機能解析に取り組みました。この研究を通じて、二重膜に囲まれた小さなオルガネラの中に実に精巧な分子システムが備わっていることを知り、その奥深さに魅了され、以来15年以上にわたり、ミトコンドリアの研究を続けています。

ミトコンドリアは細胞内の主要なエネルギー産生場であるだけでなく、鉄コファクターの合成、体熱産生、細胞死や免疫応答の制御など、多様な生命現象に関与しています。一方で、活発な生命活動に伴ってさまざまなストレスに晒されるオルガネラでもあります。近年の研究から、ミトコンドリアには環境変化や自身の機能異常を感知し、それをシグナルに変換して、適切な細胞応答を駆動する高度な情報処理機構が備わっていることが明らかになってきました。恩師である一條先生は、ASKファミリー分子を中心に、細胞がストレスを感知し、シグナル伝達に変換する仕組みの解明にご尽力されてきました。そんな先生のもとで学んだ私は、研究の対象こそミトコンドリアになりましたが、まるで遺伝子に刷り込まれたかのように中心となるクエッションは変わらず、ミトコンドリア局在の分子が、どのように環境変化を感知し、適切な細胞応答を駆動するのか、その分子機構に興味を持ち研究を進めています。

私がミトコンドリア研究を始めた頃、機能不全ミトコンドリアを選択的に除去する「マイトファジー」の分子機構が次々と明らかになり、ミトコンドリアストレス応答研究が大きな発展期を迎えました。その中心的研究者

の一人が、後の留学先となる米国国立衛生研究所（NIH）の Richard J. Youle 先生でした。先生の研究に強い憧れを抱き、2016年からポスドクとして Youle 研究室に留学する機会を得、ミトコンドリア機能不全の感知機構とマイトファジー誘導機構の研究に従事しました。さらに幸運なことに、2019年からはピッツバーグ大学において独立研究室を主宰する機会に恵まれました。渡米当初には想像もしていなかった展開でしたが、米国における研究室運営や大学院教育を含め、多くの貴重な経験を積むことができました。この期間には、細胞内の鉄不足を感知してストレス応答を活性化する新たなミトコンドリア局在タンパク質を見出し、その分子機構の解明に取り組みました。

これまで解析してきたミトコンドリア局在タンパク質は、それぞれ異なる生理機能を担っています。しかし、これらの研究を通じて、ミトコンドリアがストレスを感知する際に利用する共通原理のひとつが見えてきました。現在はその知見を基盤として、新たなミトコンドリア局在ストレス応答分子や情報伝達機構の探索を進めています。また、薬学研究科に所属する強みを生かし、ミトコンドリア機能異常が関与する疾患の理解と創薬標的の創出につながる分子基盤の確立、さらにはミトコンドリア研究を支える新しいケミカルバイオロジーツールの開発にも挑戦していきたいと考えています。研究室の名称である『オルガネラ情報学』には、細胞内オルガネラを、環境情報を感知・統合し生命現象を制御する情報処理システムとして理解したいという思いを込めています。

10年間の米国生活から帰国してまだ間もないものの、歴史と伝統ある京都大学薬学研究科の一員として研究・教育に携わることができることを大変光栄に感じております。学生や若手研究者が自由な発想で挑戦できる研究環境を育みながら、生命科学および創薬研究の発展に貢献してまいりたいと考えております。また、多くの先生方や同窓生の皆様との交流を通じて、薬学研究科のさらなる発展にも尽力してまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

就任あいさつ

生体機能化学分野教授 今西 未来

2025 年 10 月より協力講座の生体機能化学分野を担当させていただくことになりました。私は、1997 年に京都大学薬学部を卒業後、大学院では杉浦幸雄先生が主宰されておられました化学研究所の生体機能化学分野に進学し、2002 年に博士（薬学）の学位を取得しました。1 年余り米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校 Ron Vale 研究室での博士研究員を経て、2003 年 7 月に出身研究室であります京都大学化学研究所杉浦研究室に助手として戻りました。その後、二木史朗先生のもとで、助教、講師、准教授を経て、二木先生の後任として現在に至ります。

私が研究の世界に足を踏み入れた最初の動機は、「4 種類の塩基の組み合わせからなるゲノム中の情報をタンパク質がどのように探し出し、読み取るのか」ということへの純粋な興味でした。学生時代は、杉浦幸雄先生のもとでジンクフィンガーと呼ばれる DNA 結合タンパク質の DNA 認識の奥深さと柔軟性に触れました。当時の杉浦研には、先輩・後輩の垣根なく自由に議論できる環境があり、また杉浦先生からは、「自由な発想で面白いサイエンスを世界に発信する」という薫陶を授かりました。その後アメリカで分子モータータンパク質の運動メカニズムの解明に取り組んだ後、スタッフとして戻った化学研究所では、遺伝子発現が周期的に変化する時計遺伝子に魅了され、「化学的なアプローチによって、体内時計を調節したい」という思いから、時計遺伝子の人為的制御に着手しました。とはいえ、当時の私は体内時計に関する専門的な知識は乏しく、暗中模索の状態でした。そんな折、ちょうど薬学研究科に体内時計の大家である岡村均先生が着任されたのです。学部生向けに開催されたラボセミナーに宇治キャンパスから大学院生と連れ立って参加させていただき、岡村先生、土居先生から貴重な助言をいただいたことは、新しい研究を前進させる忘れられない思い出です。学生時代に培ったタンパク質の DNA 認識の特徴を活かし、人工的に設計した転写因子をツールとして、体内時計の時刻をずらす位相調節や、周期的な遺伝子発現を人為的に誘導する時計出力システムの構築を達成しました。

昨今のゲノム科学の進展により、ゲノムの配列情報が簡単に得られ、さらに自在に操作できる時代となりました。

た。しかし、核酸にはまだまだ未知の機能がひそんでいます。私はこれからも、核酸に作用する生体分子のデザインを通して、核酸の新たな可能性や機能を引き出していきたいと考えています。最近は、生命活動をリアルタイムで調節する上で中心



的な役割を果たす RNA に着目しています。特に、体内時計調節への RNA のメチル化の関与を岡村先生が見出されたことを一つのきっかけとして、核酸の化学修飾や高次構造といった、塩基配列情報にとどまらない高次の形状を検出し、精密に調節、利用するための方法論を確立することに注力しています。遺伝子の多元性に迫るとともに、将来的には疾患に対するこれまでにない診断・治療法へと展開していく予定です。

学生時代から現在まで、京都大学薬学研究科の先生方や先輩、同期、後輩のみなさまには、様々な面で助けていただき、素晴らしい刺激をいただきました。温かく育てていただきましたことに深く感謝申し上げます。これからは、学生さんの自由な発想を大切にしながら、将来につながる教育と研究を行っていききたいと考えています。京都大学薬学研究科、京大薬友会のみなさまには、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

就任あいさつ

構造生物薬学分野教授 小川 治夫



2026 年 4 月 1 日付で、加藤博章先生の後任として構造生物薬学分野の教授に着任いたしました小川治夫（おがわはるお）と申します。京大薬友会会員の皆様に、謹んでご挨拶申し上げます。

私の研究の原点は、東京工業大学（現・東京科学大学）にあります。もともとは物理学を志して入学しましたが、生命現象を物理の視点から理解しようとする生物物理学に魅了され、当時新設された生体機構学科へ進学しました。研究者としての進路を決定づけたのは、3 年次に受講した恩師・豊島近先生（現・東京大学特別教授）の講義です。そこで紹介された、クライオ電子顕微鏡による膜タンパク質の構造解析に強い衝撃を受けました。

講義の前、豊島先生が試写されていたスライドには、先生が Nature 誌に報告された当時最先端の「ニコチン性アセチルコリン受容体」と「筋小胞体 Ca^{2+} ポンプ」の構造が映し出されていました。分解能も高くなく、説明の記載もなかったため、クラスの友人などは戸惑っていましたが、私はその画像が脂質二重層に埋め込まれたイオンチャネルとイオンポンプであることを直感的に読み取りました。講義が始まると、それはまさに私の想像通りでした。この体験は、「先入観にとらわれず対象を素直に観察すれば、本質が見えてくる」という、研究者としての大切な教訓を私に与えてくれました。これこそが、私の研究人生の原体験です。

その後、豊島研究室の最初の学生として構造生物学の研究に携わり、筋小胞体 Ca^{2+} ポンプの構造解析に取り組みました。当時のクライオ電顕技術には限界があり、十分な分解能が得られず苦労しましたが、博士課程の終盤に結晶化条件を根本から見直したことが転機となりました。その成果は、2000 年に世界で初めて筋

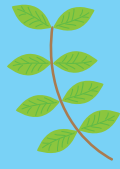
小胞体 Ca^{2+} ポンプの原子構造を明らかにした Nature 論文として結実いたしました。

博士課程修了後は、東京大学大学院医学系研究科、東京大学分子細胞生物学研究所（現・定量生命科学研究科）、米国クリーブランドクリニック・ラーナー研究所、ネバダ大学リノ校などで研鑽を積みました。その後、東京大学分子細胞生物学研究所の准教授として、ANP 受容体や Na^+ , K^+ -ATPase の研究を推進し、その構造決定に成功しました。2017 年には、P-type ATPase 研究分野で最も権威ある国際会議「The 15th International Conference on Na^+ , K^+ -ATPase and Related Transport ATPases」のオーガナイザーを務める機会をいただき、国際的な研究交流にも深く関わってまいりました。2021 年に京都大学大学院薬学研究科へ准教授として赴任し、このたび教授を拝命することとなりました。

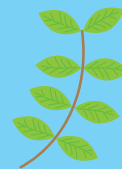
研究人生におけるもう一つの大きな転機は、心筋型リアノジン受容体（RyR2）との出会いです。心筋の収縮を制御するこの巨大 Ca^{2+} チャネルは、 Ca^{2+} が 4 分子結合するだけで開口します。 Ca^{2+} から見れば、自身の約 6 万倍もの大きさを持つ分子機械を動かしていることになります。この驚くべき生命現象のダイナミズムは、私を再びクライオ電顕による構造解析へと駆り立て、現在も研究の大きな原動力となっています。

今、伝統ある京都大学大学院薬学研究科の教授という重責を担うにあたり、私を突き動かすのはやはり、あの学生時代から変わらない「本質を見抜く観察力」と「限界を突破する挑戦心」です。自ら研究の最前線でこれを体現しながら、次世代を担う若い研究者たちへその姿勢を伝えていきたいと考えております。加藤博章先生が築かれた優れた研究基盤を受け継ぎ、創薬へとつながる構造生物薬学のさらなる発展に向けて、真摯に尽力してまいります。

京大薬友会の皆様におかれましては、今後とも指導とご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



就任あいさつ



薬品機能解析学分野教授

津川 裕司

2026 年 4 月 1 日より、京都大学大学院薬学研究科 薬科学専攻・薬品機能解析学分野の教授として着任しました、津川裕司（つがわひろし）と申します。本誌面をお借りして、京大薬友会会員の皆様に、自己紹介とご挨拶を申し上げます。

私は大阪市に生まれ、大学院で学位を取得するまで大阪で育ちました。大阪大学工学部応用自然科学科から同大学院工学研究科生物工学専攻へと進み、福崎英一郎教授・馬場健史准教授（いずれも当時）のもとで、メタボロミクス（生体内代謝物の網羅的解析技術）に資する分析化学・情報科学研究に取り組みました。当時は体育会バスケットボール部にも所属し、定期戦で京都大学をたびたび訪れていたことも、今となっては懐かしい思い出です。2012 年の学位取得後は、約 8 年半にわたり理化学研究所で、有田正規・有田誠両チームリーダーのもと、「代謝」をキーワードに植物特化代謝物の構造解析や脂質多様性の生物学的意義の解明に取り組みました。この間の合計 1 年半ほどは、カリフォルニア大学デビス校での在外研究の機会にも恵まれ、そこでの成果は発表から 10 年を経た今も年間 600 回以上引用される論文となっています。研究者として大きく成長させていただいたこの環境で、生涯をかけて向き合える学術的な問いに巡り会えたことは、導いてくださったメンターの先生方に賜った何よりの財産だと感じています。2021 年からは東京農工大学で、初めて一から自分の研究室を立ち上げました。右も左も分からないなかでのスタートでしたが、専攻内の多くの先生方に温かく支えていただいたおかげで、一年目から大きな問題もなく研究室を軌道に乗せることができました。加えて素晴らしい学生たちにも恵まれ、彼・彼女らとともに一つひとつ研究室を築き上げてこられたことは、私にとってかけがえのない財産です。そして本年、ご縁をいただいて京都大学に着任いたしました。

私の研究の根底には、「生物はなぜ多様な代謝物を創るのか、そしてその生物学的意義は何か」という問いがあります。微生物から植物・動物まで幅広い生物を題材に、分析化学と情報科学を両輪として質量分析データから代謝物の構造を捉え、生命現象や薬の作用機序の解明を目指しています。個々の生物が生み出す代謝物は、私達の予想を超えて多様で、知れば知るほど謎が深まっていき

ます。どのような代謝物が存在するのか、いつ・どこで・どのように産生されるのか、どのような役割があるのかを解き明かすことが、この研究の醍醐味であると日々感じています。

教育においては、博士後期課程への進学の有無にかかわらず、すべての学生が研究者として胸を張って社会に出られるよう指導することを心がけています。Ph.D. (Doctor of Philosophy) とは、一つの物事に確かな哲学とこだわりを持てる人材のことであり、学生として過ごす時間は、そのための準備期間であると考えています。この哲学が次世代の若手へと受け継がれていく正のサイクルの一助となれるよう、とりわけ、研究の楽しさを実感できる環境づくりと能動性の育成、国際的な環境を通じた世界で活躍できる人材の育成、そして学生それぞれが「自分にしかできない技術」を核に連携し合う研究室づくりを大切にしています。これらを通じて、分析化学と情報科学によって代謝物の構造を精緻に捉え、生命現象や薬の作用を解明する物理系薬学の一分野を、京都大学から創成していきたいと考えています。

すでに薬学部 4 回生の学生が研究室に加わり、さらに東京農工大学の研究室の学生たちが全員、京都大学まで一緒に移ってきてくれました。この頼もしい仲間たちのおかげで、京都大学での一年目もしっかりと歩み始めることができている。まだまだ発展途上の身ではありますが、薬学研究科の先生方や個性豊かな学生の皆様とともに、研究の喜びを分かち合いながら成長してまいりたいと思っております。これからどうぞ宜しくお願い申し上げます。





令和7年度薬学研究科長賞



令和7年度より、薬学部および薬学研究科の教育目標に合致し、学業成績が特に優秀な学生を顕彰するため、「薬学研究科長賞」を設置いたしました。

本賞の表彰対象は以下のとおりです。

- (1) 薬学部薬学科6年次、大学院修士課程2年次、大学院一貫制博士課程2年次に在籍する学生
 - (2) 大学院博士課程、大学院博士後期課程、大学院一貫制博士課程に在籍する学生、ならびに学位取得後3年以内の卒業生
- 選考委員会による厳正な審査の結果、令和7年度は下記の8名が「薬学研究科長賞」を受賞いたしました。

区分1（修士相当）

長谷川 拓真	病態機能分析学分野
柳澤 和希	システムケモセラピー・制御分子学分野
城戸 明日香	多細胞システム学分野
堀 遥音	生体機能解析学分野

区分2（博士相当）

西山 健太郎	バイオ医薬品化学分野
中川 優奈	生体機能化学分野
田崎 晃司	組織形成動力学分野
横井 茉里	医療薬剤学分野

令和8年3月23日に授与式が執り行われました。受賞者には賞状と副賞の図書カードが贈られました。以下に8名の受賞者のコメントを掲載します。



長谷川 拓真さんのコメント

この度は研究科長賞を賜り、大変光栄に存じます。本研究では、低分子放射性薬剤への分子修飾による体内動態制御手法の開発に取り組んでまいりました。受賞にあたり、日頃より熱心にご指導くださった小野先生、渡邊先生、中島先生をはじめ、日常的に議論を交わし支えてくれた研究室の仲間へ心より感謝申し上げます。振り返れば、研究活動においては大きな成果を急ぐのではなく、小さな目標をマイルストーンとして設定し、ひとつひとつの実験を積み重ねることを意識していました。このような継続力を大切にすることが、学術論文や学会発表での一貫した成果につながったと感じています。後輩の皆さんも、日々の小さな進歩を大切に、粘り強く研究を楽しんでください。今回の受賞を大きな糧とし、今後は多彩なモダリティに応用可能な体内動態制御手法の開発を目指して、より一層研究に精進していく所存です。

柳澤 和希さんのコメント

この度は、研究科長賞という大変名誉ある賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。配属以来、次々に現れる新たな課題に翻弄され続けるだけの3年でしたので今回の受賞は本当に驚きでしたが、同時に非常に嬉しく感じております。私

は放線菌の潜在的な二次代謝産物産生能をミコール酸含有細菌との共培養で引き出す複合培養法の研究に取り組んでおり、研究遂行のためには広範な見識が求められます。賞をいただけるような研究を行っているのは、思いがけない視点からご指導くださる先生方、親身に相談に乗ってくださる先輩方、雑用もご飯も実験も共に行ってきた同期、私などより余程優秀な後輩達に、助言をいただき、支えていただいていたからに他なりません。心より感謝申し上げます。今後は本受賞を励みに、今まで以上に研究に力を入れ、洞察力や手技の向上に努めてまいります。

城戸 明日香さんのコメント

このたびはこのような栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。井垣達史教授、谷口喜一郎講師をはじめとする井垣研究室の皆様のご支援により、5年半にわたり研究を継続することができました。また、本研究を評価してくださった選考委員の先生方にも厚く御礼申し上げます。

本研究では、異なる性質の細胞が隣接した際に細胞間相互作用を介して不適な細胞が排除される現象である「細胞競合」に着目しました。本現象における細胞間口

コミュニケーションとシグナルの時空間動態を可視化するライブイメージング系を確立しました。この系を用いて、敗者細胞の認識機構として、タンパク合成能が低下した細胞ではギャップ結合を介したカルシウムシグナルの上昇が重要であることを見出しました。さらに、前がん細胞モデルにおける敗者特異的な TNF 活性化機構の解明にも取り組んでおります。これらの成果は、多細胞生命システムの根幹をなす細胞間相互作用の理解を前進させ、多細胞生命体の維持や最適化という根源的問いに迫るものです。今後も本受賞を励みに、研究を一層発展させてまいります。

堀 遥音さんのコメント

この度は研究科長賞を賜り、大変光栄に存じます。配属されてからの 3 年間で、所属する生体機能解析学分野を取り巻く環境は大きく変化しました。その中で、研究活動に専念できる環境は決して当たり前のものではなく、多くの方々の支えによって成り立っていることを改めて実感致しました。日頃より温かくご指導くださった先生方、ラボの皆さま、そして学修・研究環境を支えてくださったすべての方々に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。私はセロトニン神経の活動記録と解析を通じて、うつ病や抗うつ薬が及ぼす影響の解明に取り組み、その成果として論文執筆や学会発表の機会を得ることができました。これらの経験を通じて研究の面白さと難しさの双方を学ぶことができたと感じています。今後は医学研究科の博士課程に進学し、さらなる研鑽を積みながら研究者として成長し、将来的には中枢性疾患の理解と治療の発展に貢献できるよう精進してまいります。

西山 健太郎さんのコメント

この度は研究科長賞をいただき、誠にありがとうございます。6 年間の研究をこのような形で評価していただき、非常に光栄に思います。ご指導いただきました大野先生、鎌田先生、秋葉先生、そしてともに研究に励んだ大野研究室の皆様に感謝申し上げます。

私は博士研究において、「抗原抗体複合体を反応場とした近接依存型反応の開発」に取り組み、抗原特異的に進行する発蛍光反応や薬物放出反応を実証しました。これまでの研究活動を振り返ると、抗体と低分子化合物という異なる創薬モダリティに関わる知見を行き来しながら、自分が「面白い」と感じる方向へ研究を広げられたことが、研究を楽しみながら続ける原動力となり、結果的に良い成果につながったのではないかと感じています。

今後は博士研究員として研究を続けます。新たな価値を有する分子を創出できる研究者を目指し、さらなる研鑽を積んでいきたいと考えています。

中川 優奈さんのコメント

この度は研究科長賞を賜り、大変光栄に存じます。本賞が今年度より創設された賞であることもあり、博士課程修了の節目にこのような賞をいただけたことを心より嬉しく存じます。これまで、細胞外小胞を利用した薬物送達技術の開発に関する研究に取り組んでまいりました。研究は思い通りに進むことの方が少なく、試行錯誤の連続でしたが、その都度目の前の一つ一つの課題に向き合い、実験を重ねながら研究を進めてまいりました。また、所属研究室の先

生方や研究室メンバーとの議論や助言が、研究を前に進める大きな支えとなりました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。これから研究に取り組む皆様にも、課題に真摯に向き合いながら、周囲と議論を重ねて研究を楽しんでいただければ幸いに存じます。本賞を今後の糧とし、今後は企業で創薬研究に携わりながら、さらなる研鑽を積み、これまでの学びを社会へと還元できるように努めてまいります。

田崎 晃司さんのコメント

この度は研究科長賞に選出いただき、誠にありがとうございます。ここまで研究を進めることができたのは、中山先生を始めとする生体情報制御学分野の皆様のご指導、ならびに現所属である組織形成動力学分野の皆様のご支援の賜物と存じます。この場をお借りして感謝申し上げます。

私はこれまで、一次繊毛の機能に重要なタンパク質輸送装置 (IFT 装置) を構成する IFT81 遺伝子の変異が遺伝性疾患を引き起こす分子基盤の解明に取り組み、さらにその研究を発展させ、IFT 装置が母中心小体に集合する分子機構の研究を行いました。これらの研究過程で、一つ一つのデータを丁寧に見返すことの重要性を実感しました。当初は些細に見えた実験結果が、後に新たな研究のきっかけや大きな発見につながるかもしれません。このような「棚から落ちたボタ餅を確実に拾う」という中山先生の教えが、今回の研究成果に結びついたので改めて感じております。

研究者としての旅路はまだ始まったばかりですので、今後も立派な研究者になれるよう邁進してまいります。

横井 茉里さんのコメント

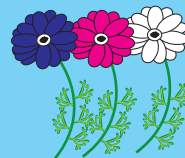
この度は薬学研究科長賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。

研究の遂行にあたり、根気強くご指導賜りました医療薬剤学分野、医学研究科附属がん免疫総合研究センターの先生方に厚く御礼申し上げます。また、薬学研究科、医学部附属病院薬剤部、各診療科の多くの先生方にご協力賜り心から感謝申し上げます。

本研究では、免疫チェックポイント阻害薬誘発性肺障害について、発症機序解明と重症化関連因子の探索を行いました。博士課程では Reverse translational research を通じて、既存の枠にとらわれず自ら一歩踏み出すことの重要性を学び、研究者間の連携や課題解決に向けた応用力を養うことができました。

今後は自立した研究者を目指し、本研究で得た経験を礎として、研究成果を臨床現場へ還元するため、副作用の予測・診断・治療法の開発に一層邁進してまいります。この度は誠にありがとうございました。

第5回沢井奨学金
第7回藤多仁生奨学金
第2回山岡清・由美子 若手研究者育成奨学金
のご報告



先任学生委員 高須 清誠（薬品合成化学分野）

沢井奨学金は、本学部OBである澤井健造氏（学部平成5年卒、修士平成7年修了）および沢井製薬株式会社のご寄付をもとに令和4年度より創設された奨学金であり、博士課程、博士後期課程の学生に対する薬学独自の給付型奨学金です。本年度の沢井奨学金の採択者は、以下の通りになります。

- ・鏈水 修欄（博士課程4回生）
- ・小竹 泰成（博士課程3回生）
- ・殿村 明日香（博士後期課程3回生）
- ・中島 弘貴（博士後期課程3回生）
- ・長友 宏樹（博士後期課程3回生）
- ・星 遥華（一貫制博士課程5回生）
- ・佐野 仁紀（博士課程2回生）

藤多仁生奨学金は、故藤多哲朗先生のご寄付をもとに令和2年度より博士課程、博士後期課程の学生に給付してきました。これに加え、令和6年度より、創発医薬科学専攻一貫制博士課程2回生にも給付しています。今回の藤多仁生奨学金の採択者は、以下の通りになります。

- ・王 一葦（博士後期課程3回生）
- ・太田 隆暉（博士課程3回生）
- ・大谷 鈴華（博士課程3回生）
- ・谷口 葵（一貫制博士課程5回生）
- ・谷島 旭（博士課程3回生）
- ・Liang Junqi（博士後期課程3回生）
- ・柴川 理子（博士後期課程2回生）
- ・川人 友里（博士課程2回生）
- ・近藤 歆音（一貫制博士課程4回生）
- ・朱 逸馨（博士後期課程2回生）
- ・中山 史也（一貫制博士課程3回生）
- ・森谷 祈立（博士課程1回生）
- ・浅野 順太（一貫制博士課程2回生）
- ・大島 佑介（一貫制博士課程2回生）
- ・沖田 龍之介（一貫制博士課程2回生）
- ・清水 目 孝太（一貫制博士課程2回生）
- ・竹内 将（一貫制博士課程2回生）
- ・橋浦 天希寿（一貫制博士課程2回生）
- ・松井 美由希（一貫制博士課程2回生）

また、山岡清・由美子 若手研究者育成奨学金は、薬学分野の将来を担う学生および若手研究者が、国際的な教育・研究活動や産官学連携の実践的な経験を通じて、広い視野と専門性を兼ね備えた人材へと成長することを支援する目的で令和7年度に創設されたものです。今回の奨学金の採択者は、以

下の通りになります。

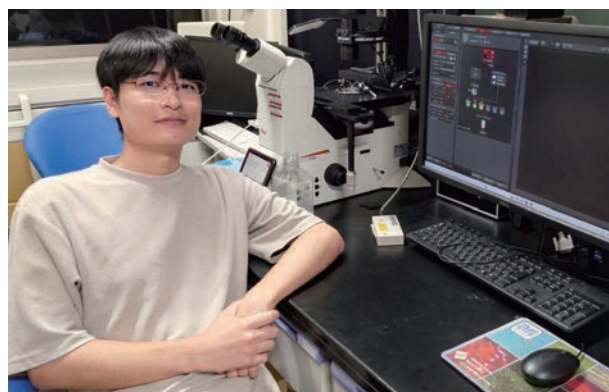
- ・前田 朝登（博士後期課程3回生）
- ・渡邊 航（博士後期課程3回生）
- ・齋藤 郁貴（博士後期課程2回生）
- ・中村 楽（博士後期課程2回生）
- ・小倉 鷹矢（博士後期課程1回生）
- ・河尻 萌絵（博士後期課程1回生）
- ・山口 壮（博士後期課程1回生）

本年度の贈呈式は、令和8年9月28日に開催される予定です。



「沢井奨学金を受給して」

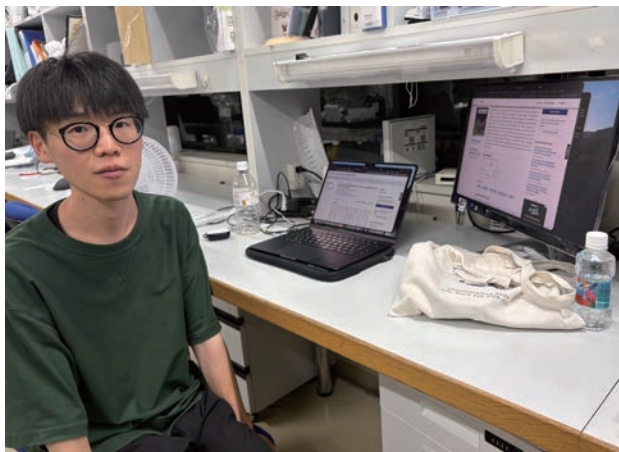
生体分子認識学分野・博士後期課程3回生・長友 宏樹



この度は、沢井奨学金によるご支援を賜ることとなり、心より感謝申し上げます。澤井健造様、沢井製薬株式会社様、そして本奨学金の設立・運営に携わるすべての皆様に、深く御礼申し上げます。私は、骨の成長を担う成長板軟骨細胞の機能について、細胞内のカルシウム (Ca^{2+}) シグナルに着目して研究に取り組んでおります。骨の成長は小児の正常な発育に不可欠であり、その異常は低身長症をはじめとする骨系統疾患の発症につながります。私は、所属研究室で独自に確立された細胞内 Ca^{2+} ライブイメージング技術を用いて、骨の成長を制御する新たなシグナル伝達経路の解明を目指しています。得られた知見が、種々の骨系統疾患に対する新たな治療法や創薬につながり、一人でも多くの患者さんの力となることを願いながら日々研究に励んでいます。この思いは、貴社が掲げる「なによりも患者さんのために」という理念とも深く通じるものだと感じています。いただいたご厚意への感謝を忘れることなく、研究成果を通じて社会に貢献できるよう、一層精進してまいります。

「藤多仁生奨学金を受給して」

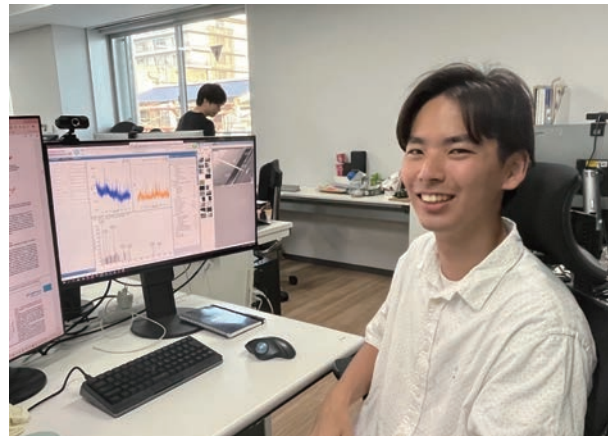
薬品分子化学分野・一貫制博士課程3年生・中山 史也



この度は、藤多仁生奨学金によるご支援を賜り、藤多先生並びに本奨学金の運営関係者の皆様に心より御礼申し上げます。私は有機化学を専門分野としており、さまざまな生物活性物質や医薬品に広く見られる代表的な複素環骨格の一つであるインドール環を用いた反応開発に取り組んでおります。本奨学金のご支援により経済的な負担が軽減され、これまで以上に研究に専念できる環境を得ることができました。このような貴重な機会をいただきましたことに、深く感謝申し上げます。皆様からのご支援には大きな期待と温かい励ましが込められていると受け止めております。そのお気持ちに応えられるよう、今後も研究に真摯に取り組み、より一層成果を挙げられるよう努力してまいります。

「山岡清・由美子 若手研究者育成奨学金を受給して」

生体分子計測学分野・博士後期課程3年生・前田 朝登



この度は、山岡清・由美子若手研究者育成奨学金によるご支援を賜り、山岡清先生、山岡由美子先生、ならびにご家族の皆様へ心より感謝申し上げます。私は現在、細胞内で絶えず働くタンパク質に着目し、細胞内タンパク質全体（プロテオーム）の高次構造変化を網羅的に解析する「構造プロテオミクス」に取り組んでいます。機能発現を決定するタンパク質の構造変化を捉えることで、細胞機能を調節する分子システムを包括的に理解する手法の確立を目指しています。今回のご支援により、構造プロテオミクスの先駆者である Mikhail Savitski 博士の研究室に2か月間滞在し、タンパク質の翻訳後修飾が構造安定性に及ぼす影響を体系的に解明する新たな研究に取り組むことができました。現地研究者との議論を通じて研究を大きく前進させるとともに、国際的な環境で研究、議論、生活を行う貴重な経験を得ました。この経験を糧に、今後も研究に一層精進してまいります。この度は誠にありがとうございました。

模擬患者の募集案内

「模擬患者」とは、医療系学生が医療面接や診察の練習を行う際に、患者役としてご協力いただく方です。設定されたシナリオに沿って実際の患者のようにふるまっていただき、学生の実践的な学びを支えていただきます。登録および養成は京都大学大学院医学研究科 医学教育・国際化推進センターが行っており、医学部だけでなく薬学部6年制課程の教育にもご協力いただいています。現在、模擬患者の登録者が不足しており、ご協力いただける方を募集しております。お近くにお住まいの薬友会員の方でご関心のある方は、ぜひ下記 QR コードまたはホームページよりご連絡ください。（※本学の在学生（大学院生を含む）は対象としていません）

▶ 模擬患者募集ページ

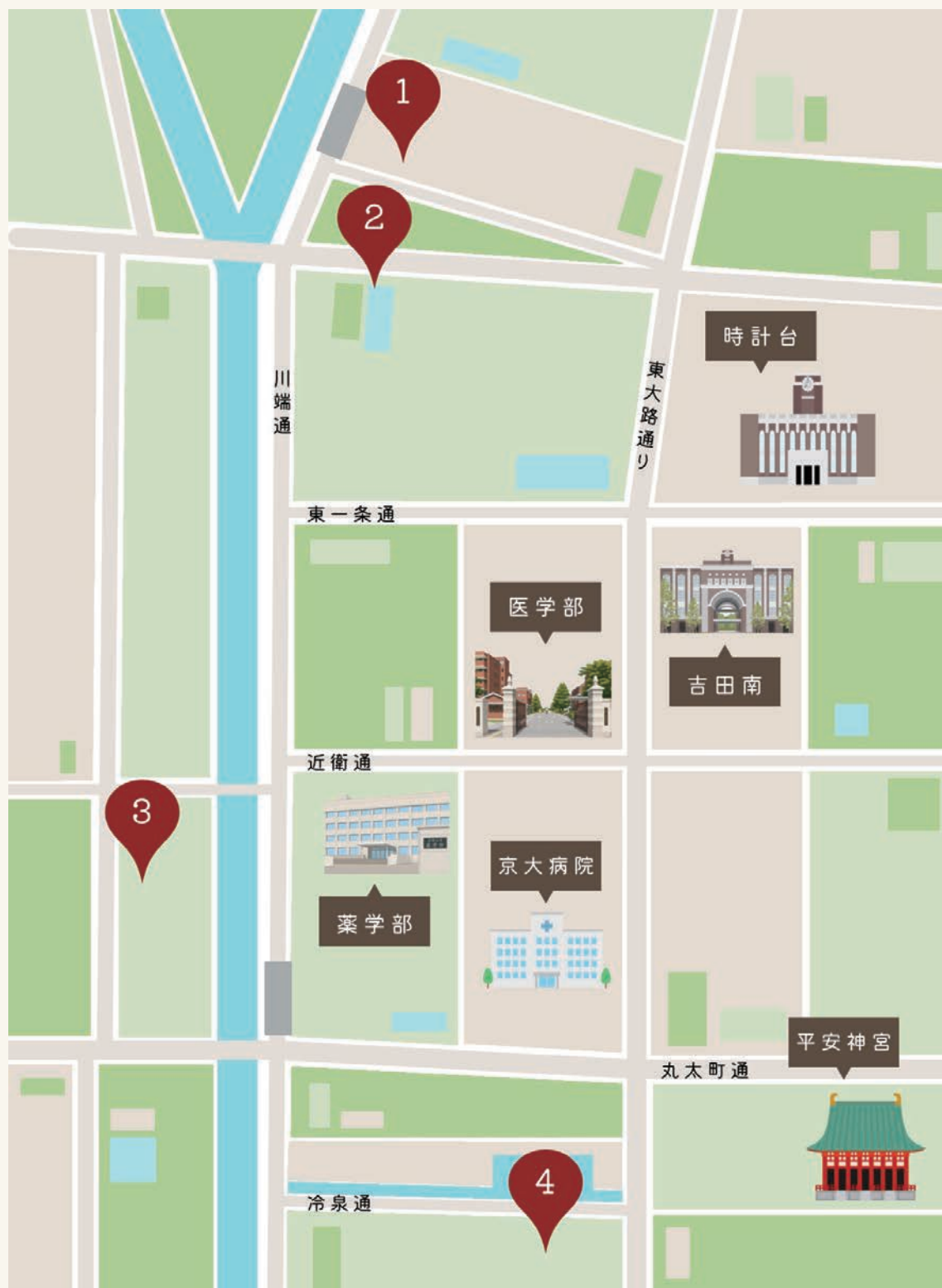
<https://cme.med.kyoto-u.ac.jp/education/simulated-patient/>
皆さまのご参加をお待ちしております。

統合薬学教育開発センター教授 山下 富義
医学教育・国際化推進センター教授 片岡 仁美



Vol. 2 ご飯屋さん探訪

去年好評（！？）だったご飯屋さん探訪企画の第2段です！前はランチのお店を中心に紹介しましたが、今回は朝ごはんを食べられるお店をまとめました！1限にも間に合うお店もあるので、ぜひ立ち寄ってみてください！





1 お米自慢 おにぎり屋さん ☀7:00~

出町柳駅を出てすぐのところにあるおにぎり屋さんです。うめ、鮭、かつおなどの定番のおにぎりの具の他、野沢菜、わさび菜などのおにぎりが並びます。おにぎりの他にも、焼き魚、温かいご飯をいれてくれるお弁当などもありました！今回は己の欲が赴くがままに鮭とわかめをチョイス。鮭ファンとしては大きな鮭がとても嬉しく、わかめおにぎりは給食のわかめご飯を思い出す懐かしい味でした。優しい味のおにぎりは、1日のスタートダッシュを決めるエネルギーを与えてくれること間違いなしでしょう！

2 喫茶ゴゴ ☀8:30~

出町柳駅から徒歩数分。深みのある木の扉と窓から覗くサイフォンが目印の喫茶店。モーニングでは飲み物とトーストに加えてバナナかゆで卵を選ぶことができますが、どちらも魅力的で、メニューを抱えて悩んでしまいました。アイ스티ーに添えられているシロップは可愛い小瓶に詰められていて、好みに合わせてたっぷり甘さを楽しむことができます。煙草の香りや常連さんの和やかな会話を感しながら頬張るトーストはふわふわでボリュームー！朝からしっかり食べたい日にうれしい、満足感のある一皿です。



3 かもがわCafe ☀10:30~

様々なポスターで彩られた階段を上がると、可愛いカモの置物たちが迎えてくれます。柔らかそうなソファや温かみのある木製のテーブル。カウンター席に面した窓にはところどころ色鮮やかな硝子が嵌められ、柔らかな光が店内へと差し込んでいます。モーニングの時間帯にはトーストやスコーンのセット、ケーキなど美味しそうなメニューが並びます。今回はアップル克蘭ブルと桂花茶を頼みました。金木犀のほのかに香るお茶の苦みが、添えられた濃厚なクリームや林檎の甘味と合わさって絶品でした！



4 早起亭うどん ☀5:00~

店名が大きく書かれた白い布地の真横には、たくさんの座席がありました。オープンなテラス席から、室内席まで充実しています。メニューも豊富で、うどんだけでなくお蕎麦も扱っていらっしゃいます。今回は天ぷらうどんを注文しました！しばらく待って、受け取り口でお代と交換します。席について、うどんつゆを一口飲むと、感激。かなり質の高いおつゆに、切れのあるうどん。しっかりとした食べ応えのある海老天が、一日の始まりを祝福してくれるようでした。



組織形成動力学分野

倉永 英里奈 教授



研究室 HP

研究室訪問

Q. 先生の研究内容について教えてください

A. 体を構成する細胞が、どのように組織や器官を形づくり、どのように維持されるのかを研究しています。研究の柱は2つあります。受精卵から細胞が増殖し、体が形づくられていく「発生」の仕組みと、形成された体の恒常性や機能を保つ「維持」の仕組みです。

Q. 研究の面白さはどんなところですか？

A. 体の中は完全には解き明かされていない生命の神秘に満ちています。予想外の結果に出会うたびに仮説を組立て直し検証を重ねる。試行錯誤の末、ばらばらだった結果がつながった瞬間の喜びは格別ですが、そこからまた新たな問が生まれます。得られた答えを人と共有し、納得や反論を重ねながら深めることにも面白さを感じます。

Q. 研究室の強みや特徴を教えてください

A. 研究の基盤にあるのはライブイメージング技術です。細胞が組織を形づくる過程を観察する技術を、研究室メンバーが使える体制を整えています。また、ショウジョウバエ遺伝学的手法や疾患モデルを使って、薬剤の効果を検証することもできます。

Q. この分野に進むきっかけは？

A. もともとは農学系で、身近な人に喜んでもらえる社会還元型の研究を志していました。しかし「なぜ効いたのか」を説明できず、細胞の中で何が起きているかを理解する必要性を痛感しました。行き詰まっていたとき出会ったのが、ショウジョウバエの行動遺伝学の本でした。たった一つの遺伝子変異でオスがオスに求愛するという劇的な変化に衝撃を受け、博士課程からハエの研究を始め、それから30年になります。

Q. 今後の展望を教えてください

A. 薬学研究において、薬が「なぜ効くのか」という生物学的メカニズムを明らかにすることは、私たち基礎生物学者が貢献できる点だと考えています。この研究室ならではの独創性を活かした、学術的にも面白い研究を展開していきたいと考えています。

Q. 学生のうちにやっておくと良いことは？

A. 学生時代は、与えられた環境の中で自発的に動く力を養う期間だと思います。恩師から勧められたことの1つのは「質問をすること」でした。人の話を自分のこととして聞かなければ、質問は生まれません。「変な質問をするより、しない方がダメだ」と言われ続け、勇気を出して質問する練習を重ねました。質問することに慣れてくると、自分が本当に面白いと思える「問い」が少しずつ見つかるようになります。それが、その後の研究や人生を面白くする原動力になると思います。

INTERVIEWERS

薬学部 1 回生

常松鼓太郎

張博翔

生体分子計測学分野

石濱 泰 教授



研究室 HP

Q. 石濱先生の研究内容について教えてください

A. プロテオームを測るために必要な基盤技術を開発し、そして実際にそれをいろんなものにあてはめて、タンパクを測る、という研究をしています。僕は、基盤技術の開発というところが、すでに終わっているものを新たに研究対象とはしません。技術が最初に来て、そのあとにサイエンスが来る、というようなことをやると決めています。技術なしの科学はやりません。

Q. 研究室の強みや特徴はなんですか？

A. テクノロジードリブン、つまり、テクノロジーとサイエンスの両方を意識している、というのが特徴です。僕はもうとにかくテクノロジーがやりたくてサイエンスをやっているの、そこが研究室の強みかどうかはわかりませんが僕の強みではあるでしょう。学生さんが毎年配属されて研究プロジェクトを進めていきますが、その時には必ず何か新しいツールを、あるいは技術を開発して、それを対象に当てはめるというサイクルを回そうという風になっています。

Q. 研究をしていく中で面白いと思うのはどんなところですか？

A. 30 代くらいまでは自分で手を動かしていたので、実験をやるのが楽しかったです。実際に実験をやっていく中で新しいものが出てきたり、思いもよらないものが出てきたりすると、そこに大きな喜びを感じていました。だんだん自分で手を動かさなくなってくると、妄想しているのが楽しくなってきました。道を歩いていたりなんかすると、いいことが思いつく事があります。これもしかしてすごく良いアイデアなんじゃないか、もしもこれが当たったら、こんなこともできるんじゃないかって妄想が膨らんでいくサイクルがあります。それが1つ形になって、じゃあこういうプロジェクトを次にやってみようっていうのを、妄想しているのが楽しいです。逆にそれを実際にやり始めて、予想と違う方向に大きく変わって、全く別の何かが見つかる、というのもまた楽しいです。こういった研究のサイクル全体が楽しいです。

Q. 学生のうちにやっておくと良い事は？

A. 若い時はまだまだ無限の時間があるように見えますが、案外、できることなんて限られています。僕も気持ちとしては18歳に戻れますが、肉体などいろんなものは戻れません。何をしても無駄ではありませんが、本当にやらなきゃいけない時にやらないことは絶対後悔に繋がるので、限られている時間の中で、とにかく一生懸命やっていくということはおすすめです。

第11回薬学の未来を考える京都シンポジウム 開催報告



京都大学大学院薬学研究科 高須清誠

令和7年11月1日(土)、“天高く馬肥ゆる秋”を思わせる爽やかな秋晴れのもと、京都大学薬学研究科・藤多記念ホールにて、第11回「薬学の未来を考える京都シンポジウム—創薬力強化に向けた未来戦略—」を開催しました。当日、全学では第20回京都大学ホームカミングデイ2025も開催されており、午前中に各種イベントへ参加された後、本シンポジウムへ足を運んでくださった方も多くおられたようです。

本シンポジウムは、京大薬友会と京都大学大学院薬学研究科の共催により実施され、学内外から87名(うち在学生22名)の参加を得て、盛会のうちに終了しました。

今回のテーマ「創薬力強化に向けた未来戦略」には、「これから20年先を見据え、薬学の研究・教育はどのようにあるべきかを皆で考える機会にしたい」という思いを込めました。そのため、主に中央省庁で薬学教育や医薬行政に携わる第一線の方々に講演者としてお招きしました。

当日は薬友会総会終了後にシンポジウムがスタートし、私から開催趣旨をご説明した後、4題のご講演をいただきました。さらに、講演者の先生方に加え、日本薬学会連合会長のお立場から本学名誉教授の高倉喜信先生にもご参加いただき、パネルディスカッションを行いました。本研究科では、このように行政・大学関係者が一堂に会して将来を議論する企画は、これまであまり例がありませんでした。そのため、正直なところ「うまく議論が盛り上がるだろうか」と不安もありました。一方で、この機会を通じて、関係省庁が描く未来像と本学が目指すべき方向性を共有し、お互いの距離を少しでも縮めて仲良くなる場になればと期待していました。さて、その結果はどうだったのでしょうか。以下、当日の様子をご紹介します。

講演1 山下富義先生

(京都大学大学院薬学研究科・教授・副研究科長(現研究科長))
「京都大学大学院薬学研究科における創薬人材育成の取組」



山下先生は、長年にわたり本研究科の教育・研究企画やカリキュラム改革に携われ、他大学との連携教育についても豊富な経験を有されています。

ご講演では、本研究科における研究・教育改革の歩みを振り返るとともに、「京大薬学ならではの」創薬人材育成に向けた現在の取組と将来構想についてお話しいただきました。特に、山下先生が中心となって推進してこられた少人数教育や能動的学修(アクティブラーニング)が、学生の主体性や学習意欲の向上に大きく寄

与しているというお話が印象的でした。また、大阪大学薬学研究科などとの連携事業についても紹介され、本学が今後目指すべき教育の方向性について多くの示唆を得る講演となりました。

講演2 小林一隆先生

(文部科学省・高等教育局医学教育課・薬学教育専門官)
「創薬力強化と薬学教育」



小林先生は、薬学教育の質保証やモデル・コア・カリキュラムの改訂など、全国の薬学教育に関する施策を文部科学省において担当されています。ご講演では、この20年間で薬学部数が大幅に増加し

たことや、臨床教育が重視される一方で創薬人材育成の強化が課題となっている現状について整理してご紹介いただきました。

また、全国の薬学部長や教育関係者からのアンケート結果として寄せられている課題認識と、それに対応する文部科学省の取組についても説明がありました。日本政府の成長戦略において創薬・先端医療分野が重要な位置付けを占めていることから、創薬力向上と人材育成の重要性を改めて認識する機会となりました。質疑応答では会場から多くの意見や要望が寄せられましたが、小林先生は一つ一つ丁寧に応答され、活発な議論が展開されました。

講演3 西尾翔貴先生

(経済産業省・商務・サービスグループ生物化学産業課・課長補佐)

「創薬、再生・細胞医療分野における我が国の産業戦略」

本学医学研究科出身の西尾先生は、理系・医療系のバックグラウンドを生かし、経済産業省において創薬・ライフサイエンス政策に携わっておられます。ご講演では、世界の創薬を取り巻く環境の変化と、その中で日本が果たすべき役割について概説いただきました。



また、iPS細胞をはじめとする先端技術の産業化に向けて、再生・細胞・遺伝子治療分野の製造基盤整備、CDMOの育成、人材育成など、経済産業省の取組について紹介されました。

再生・細胞医療の発展が期待される一方で、専門人材の不足が大きな課題であることが示され、本学における教育・人材育成の重要性を改めて認識しました。質疑応答では、製造プロセスや品質評価を支える制度整備の必要性についても議論され、革新的技術の社会実装の難しさと重要性を考える機会となりました。

講演4 日下部哲也先生

(日本医療研究開発機構 (AMED)・創薬事業部長)
「創薬イノベーションにおける薬事レギュレーションとアカデミア連携」



本研究科出身の日下部先生は、厚生省（現厚生労働省）入省後一貫して薬事行政に携わり、その間、米国留学や米国薬局方事務局での勤務、大阪市立大学教授など多彩な経験を積まれてきました。ご講演では、創

薬におけるレギュラトリーサイエンスの役割について、豊富な実例を交えながらわかりやすく解説いただきました。

特に、「レギュラトリーサイエンスは研究を規制する学問ではなく、優れた技術を安全かつ確実に患者へ届けるための科学である」というお話が印象的でした。また、創薬には革新的な研究を推進する“アクセル”と、安全性や信頼性を担保する“ブレーキ”の双方が不可欠であるとの指摘は、基礎研究を担う大学にとって大変示唆に富むものでした。アカデミアと規制当局、支援機関との連携の重要性を改めて認識する講演となりました。

パネルディスカッション

登壇者：山下富義先生、西尾翔貴先生、日下部哲也先生、高倉喜信先生（司会：高須清誠）
(小林先生は、他の公務のため途中でご退席され、残念ながらご参加いただけませんでした)



パネルディスカッションでは、「創薬力強化に向けた未来戦略」をテーマに、薬学教育、人材育成、産学官連携、研究支援制度など幅広い話題について意見交換が行われました。

個々の議論の詳細については割愛いたしますが、会場からもパネリストの先生方からも率直かつ活発な意見が数多く出され、大変充実した議論となりました。司会としては、関係省庁・大学・学会の立場を超えて互いの考えを共有し、将来に向けた連携のきっかけとなる場を目指していましたが、普段は直接意見交換する機会が限られていることもあり、制度や行政の取組に対する厳しい意見や要望が出される場面もありました。

一方で、登壇者の先生方にはそうした意見にも真摯に伝えていただき、参加者の皆様もそれぞれの立場を尊重しながら議論を深めてくださいました。時に緊張感のあるやり取りも見られましたが、最後には和やかな雰囲気の中で意見交換を終えることができ、本シンポジウムの目的であった、互いを理解し、距離を縮める場として一定の役割を果たしたと感じています（仲良くなれたかは・・・???）。

シンポジウムの結びとして、京大薬友会外部役員代表である大川滋紀氏より、心のこもった閉会の辞をいただきました。講演会後は、医薬系総合研究棟 1 階ホールにて懇親会が催され、世代や分野を超えた活発な交流ができました。最後に、ご講演いただいた先生方ならびにご参加いただいた皆様に改めて深く感謝申し上げます。本シンポジウムが、薬学の未来を考え、次世代の創薬人材育成につながる新たな連携や議論の契機となることを願い、開催報告の結びといたします。

第17回生涯教育講演会

「変化を力に ～私たちが選んだキャリアの道～」

日時 2026年10月31日（土） 14:30～17:00（13:45入室開始）

会場 実地：TKP東京駅カンファレンスセンター ホール11A サテライト：京都大学薬学部 藤多記念ホール
懇親会：東京駅近郊飲食店を予定（実地参加者のみ）

参加費 講演会、懇親会ともに無料 ※講演会へのみの参加も可能です。

参加申し込み <https://forms.gle/E13QC8KoQbmiXqTm6>
※定員に到達したら締め切らせていただきます。



プログラム（敬称略。※招待演者のご所属は2026年8月現在のものです。）

14:30 開会挨拶

14:35 山下 富義（薬友会長・京都大学大学院薬学研究科 研究科長）「薬学研究科・薬学部の近況」

14:55 山本 憲幸（株）Flox Bio

「研究者として、起業家として、創薬に向き合うー研究・事業・起業をつなぐキャリアー」

15:20 松村 敦子（株）アインホールディングス「薬局機能分化時代における専門薬剤師の育成」

15:45 ～休憩～

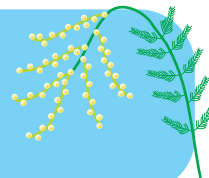
16:05 辻 信弥（北海道大学 化学反応創成研究拠点）「海外博士課程という選択とその後」

16:30 日下部 哲也（国立健康危機管理研究機構）「薬事レギュレーションと創薬イノベーションの共進化」

16:55 閉会挨拶 終了後 懇親会場へ移動し、懇親会

最新情報は随時薬友会ホームページへアップします。

講演会情報ページ <https://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/alumni-association/yakuyu/event/shogai/>



産学連携戦略企画室 星野 大

2025 年 8 月 29 日（金）に、第 1 回「産学合同博士発表交流会」を開催いたしました。



本交流会は、近年ますます高度化・複雑化する創薬・ヘルスケア分野において、我が国の創薬力を回復し、世界へ発信・展開していくためには、創薬関連企業との緊密な連携が不可欠であるとの考えのもと、高須産官学コンソーシアム準備委員長を中心に企画されたものです。本研究科として初めての試みでしたが、27 社・51 名の創薬関連企業の研究者、研究所長、人事担当者の皆様にご参加いただき、本研究科博士課程学生と企業との交流を深める貴重な機会となりました。

当日は、藤多記念ホールにおいて竹本研究科長による開会の挨拶の後、31 名の博士課程学生による 1 分間のフラッシュトークが行われました。続いてアウトリーチエリアではポスタープレゼンテーションが実施され、企業の研究者との間で活発な議論が交わされるとともに、名刺交換を通じて新たなつながりを築く様子も見られました。

その後、7 社による企業紹介では、修士課程修了者に加え、博士号取得者の採用にも積極的に取り組んでいることや、各社の研究開発の特色などが紹介されました。博士課程学生はもちろん、修士課程学生も熱心に耳を傾け、自身の将来を考える貴重な機会となりました。

最後のポスタープレゼンテーション（第 2 部）では、博士課程学生と企業研究者が軽食や飲み物を片手にリラックスした雰囲気の中で交流を深め、研究内容だけでなく将来のキャリアについても活発な意見交換が行われるなど、終始和やかな雰囲気のうちに交流会を終えることができました。

なお、参加企業からは、本交流会に対して以下のようなご意見・ご感想をいただきました。

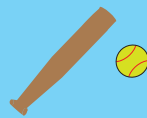
- 学生のポスター発表について多めに時間を取っていただけて多くの学生と交流できました。
- 学生が企業担当者と会話をしようとする意気込みを感じました。
- ポスター発表の 1 分間のショートプレゼンが良かったです。
- 手探りながらも、博士課程人材の育成を意識して前向きに取り組まれている姿勢に、ポジティブな印象を持ちました。
- 早期に多数の学生と交流をもち、研究内容を知ることができたため、良いイベントだったのではないかと思います。
- このような交流は企業と学生双方の理解を深めるだけでなく、学生の皆さんが今後のキャリアや研究の社会的意義を考える一助になると強く感じました。



2026 年度は 8 月 7 日（金）に開催し、7 社・14 名の創薬関連企業の研究者・人事担当者ならびに 36 名の博士・一貫制博士学生（うち発表 20 名）が参加し、双方向でのポスター発表を通じて交流を深めました。さらに、2026 年 11 月 20 日（金）にも開催予定です。次年度以降も本交流会を継続的に開催し、企業と学生が積極的に交流できる場を創出していきたいと考えています。

京大薬友会員の皆様にも、積極的なご協力を賜れますと幸いです。

ご協力をご希望の方は sanren@pharm.kyoto-u.ac.jp までご連絡をお願いいたします。



スポーツ大会



ソフトボール



優勝コメント：薬解 & 生体

まずは、このような素晴らしい大会を開催してくださった京大薬友会をはじめ、各研究室の皆様にご心より感謝申し上げます。我々、松崎・石濱研は、一昨年の決勝戦で当時の3年生チームに敗れ、悔しい思いをしました。本大会では、昨年の準優勝・優勝チームを破って迎えた決勝戦で、井垣研と一進一退の攻防を繰り広げ、1点差の接戦を制することができました。これは、これまでの練習の積み重ねの成果であったと感じています。また、本大会を通して研究室内の結束が深まるとともに、土居研をはじめとする多くの研究室の皆様と交流を深めることができました。昨年、松崎先生がご退官され、今年度をもって薬品機能解析学分野は節目を迎え、各自が新たな道を歩き始めます。最後にこのような素晴らしい思い出を共有できたことを、大変うれしく思います。ありがとうございました。



フットサル

決勝トーナメント



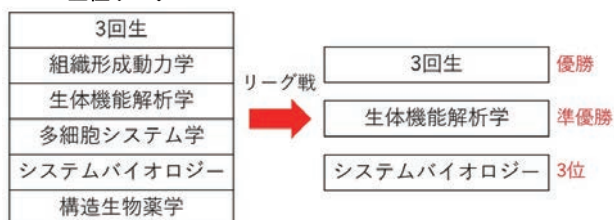
優勝コメント：システムバイオロジー

この度は、フットサル大会で優勝することができ、非常に光栄です。当日はあいにくの雨となりましたが、それだけに記憶に残る大会となりました。一筋縄ではいかない試合ばかりでしたが、経験者の4年生を中心に支え合いながら、チーム一丸となり戦い抜いたことが成果につながりました。今回の薬友会スポーツ大会優勝は、システムバイオロジー分野創設以来、初の快挙です。悲願のタイトルを手にすることができ、とても感慨深いです。来年度は、この勢いのままフットサル連覇はもちろんのこと、スポーツ大会三冠を目指して頑張りたいと思います。ありがとうございました。



バレーボール

上位リーグ



優勝コメント：3年生

3年生は来年から研究室配属ということもあり、このメンバーで参加する最後の大会がこのバレーボール大会だったので、優勝できてとてもうれしいです。今年は授業で実習があり、研究室の先輩方とお話しできる機会がたくさんあったので、スポーツ大会で再会して運動するのが楽しかったです。バレーボール大会では、3年生チームは経験者も未経験者もたくさん来てくれて、みんなたくさん試合に出場することができました。予選リーグから相手の研究室も強かったのですが何とか辛勝に辛勝を重ね、全勝で優勝することができて、とてもうれしかったです。3年生チームとして出場するのは今回で最後ですが、来年度からはよいライバルとしてスポーツ大会で再会するのが楽しみです！



2025 年度 修士（薬科学）・博士（薬科学）・博士（薬学）学位授与者

修士(薬科学)	
Mariam Gaber Tawfik Abdelaziz Alkarmouty	Analysis of Cytochrome P450-Substance Interactions through Large Language Model-Based Text Mining (大規模言語モデルによるテキストマイニングを介したチトクロムP450-物質間相互作用の解析)
河尻 萌絵	アゾ-エン反応を経由したアリルアルコールδ位の位置選択的なC-Hアルキル化
河本 真輝	フォトクロミック円偏光発光を示すヘリセン-ローダミン複合型分子の開発研究
坂上 峻哉	触媒的水素原子移動を活用した <i>o</i> -カルボランのB-H結合官能基化法の開発
楊 佳明	高度に縮環した四環性アルカロイドLycopladine Hの合成研究
米山 架	アミノホスホニウム塩とカルボン酸塩を用いるN-Meアミド化反応の開発
杉原 弘晃	機能性イリジウム-カルベン錯体触媒を用いたアルコールの直接重水素化反応
仙波 秀世	オキサロ酢酸検出プローブの開発を志向したヒドラジンの環化反応に関する研究
森山 仁尊	N-プロモアミドを経由したペプチドの化学修飾法の開発
大杉 悠斗	曲率認識ペプチドを担体とした細胞外小胞の単離法の最適化
坂上 信太郎	曲率膜破壊ペプチドを活用した抗1型アレルギー性炎症剤の開発
鍋谷 友希	海藻由来成分によるアミロイドβ凝集抑制機構の解析
吉尾 航一	アジ腸内細菌に由来する細胞外小胞の抗炎症作用分子の探索
岡本 茉佑奈	Cryo-EM単粒子解析による心房性ナトリウム利尿ペプチド受容体の創薬基盤の構築
御木 舞花	クライオ電子顕微鏡によるABC多剤排出トランスポーターの疑似的基質-MgATP三重複合体の解析
堤 あゆな	Cryo-EMによる心筋型リアノジン受容体-カルモジュリン複合体のCa ²⁺ 濃度依存的構造変化の解析
元生 秀翔	ABC多剤排出トランスポーターの1分子X線動的解析系の構築
岸田 尚大	光駆動型協働触媒を用いた脂肪族アルケンのマルコフニコフ選択的ヒドロアミノ化反応の開発
下野 広樹	スピン中心移動を用いたヘテロ脂環式化合物の環拡大反応の開発
登岸 奏太	N-ヘテロ環カルベン/光酸化還元協働触媒を用いたアルケンのアシルアゾール化反応の開発
柳田 瞭	1,4-ビス(アルキルチオ)ベンゼンを基盤とする光レドックス自己触媒的炭素ラジカル生成に関する研究
石川 晴規	PDE4およびPDE8阻害薬による軟骨細胞内Ca ²⁺ シグナル活性化と軟骨分化制御
山形 史音	肝臓特異的Tric-b欠損マウスを用いた肝細胞内Ca ²⁺ 動態解析
吉田 康晟	関節リウマチ関連HLA class IIの機能解明に向けたヒト化HLAマウスの作製
大庭 夕佳	Notch・EGFR シグナル協調によるショウジョウバエ成虫唾液腺腫瘍モデルの確立
小畑 慶人	細胞内RNAグアニン四重鎖の検出手法の開発
吉川 あゆみ	コアセルバートによるmRNAの細胞内送達手法の開発
清川 めぐみ	コアセルバート形成のための負電荷タグ修飾抗体の創製と抗体のサイトゾル送達
笹木 結梨	RNA脱メチル化酵素FTOに対する新規ペプチドリガンド探索
馬場 望衣	Melittin誘導体を基盤とした高分子細胞内送達ペプチドの改良研究
阪上 礼奈	in vitro炎症応答評価モデル構築に向けた機械刺激印加可能なgut-on-a-chipの開発
大塚 椋太	Establishment of a 5-FU-induced Taste Disturbance Rat Model and Histological Analysis of the Peripheral Gustatory System (5-FU誘発性味覚障害ラットモデルの確立と末梢味覚系の組織学的解析)
柏山 陸斗	アルツハイマー病の治療を目的としたアミロイドβ標的α線放出薬剤の合成と基礎的評価
田中 真央	放射性薬剤の腫瘍集積向上を目的とした新規脂肪酸型アルブミンバインダーの探索
荒川 実来	光刺激による細胞機能の時空間制御を基盤としたDDSの基礎的検討
金谷 千慧	RNA結合タンパク質L7Aeを用いた細胞外小胞への搭載量にRNAの種類が与える影響
谷脇 杏奈	樹状細胞由来細胞外小胞に対する2種類の免疫分子の搭載法の開発
西村 正舞	液滴アレイ空間融合技術を利用した基板上の微小領域への分子固定
小野木 晴哉	The role of amyloid-beta in a mouse model of chronic cerebral hypoperfusion (慢性脳低灌流症マウスにおけるアミロイドβの役割)

2025 年度 修士（薬科学）・博士（薬科学）・博士（薬学）学位授与者

玉田 晃生	Involvement of microglia and sexual dimorphism in a mouse model of fibromyalgia (マウス線維筋痛症モデルにおけるミクログリアの関与と性的二型)
垣内 大斗	高存在量タンパク質の消化耐性を逆手に取った高深度血漿プロテオミクスに関する研究
戸井 沙紀	Protein Kinase Cのアイソフォーム選択的活性計測に向けた人工基質ペプチドの開発
平沼 侑奈	脱リン酸化反応を用いたリン酸化プロテオームの高次構造解析に関する研究
山下 裕大	脂肪酸受容体GPR120による耐糖能と代謝の成長に伴う変化の解析
山田 澄佳	MAIT細胞を制御するMR1リガンドの構造活性相関研究
齋藤 珠乃	Dysfunction of the meningeal lymphatics induced by chronic sleep deprivation (慢性的睡眠障害による髄膜リンパ管の機能障害)
森下 和奏	Molecular mechanisms regulating the internalization of orphan G protein-coupled receptor Gpr176 (オーファンG蛋白質共役受容体Gpr176の細胞内移行を制御する分子機構)
説田 武尚	新規抗真菌剤アムフィオール全合成
徳田 天成	アモキシタミドAおよびストレプトスフェリンFの全合成
東出 萌樹	嗅上皮における細胞膜上プロゲステロン受容体mPRδの機能解析
JIANG ZHIQIAN	Improving Biological Sequence Prediction with AlphaFold2 Representation (AlphaFold2特微量による生物学的配列予測の精度向上)
岸本 天寧	Elucidating the molecular mechanism underlying BCKA-mediated cell differentiation in myeloid leukemia (分岐鎖ケト酸代謝経路を介した骨髄性白血病細胞の分化制御メカニズムの解明)
筒井 雄也	コンジュゲート化学を用いたFab架橋型抗体の創製
博士(薬科学)	
TANG ZIHAN	Macrophage migration inhibitory factor induces phospholamban phosphorylation in cardiac muscle (マクロファージ遊走阻止因子は心筋においてホスホランパンのリン酸化を誘導する)
数多 伸紀	アルブミンとの相互作用を利用した新規がん標的放射性薬剤の開発に関する研究
黒川 宗希	非ベンゼノイド多環芳香族炭化水素の合成と機能創出
中川 雅就	光駆動型酸化的ラジカル極性交差機構によるsp ³ 炭素-ヘテロ原子結合形成反応の開発
中村 梨香子	可視光励起ホウ素アート錯体を用いた生体分子の機能化
松尾 朋信	光酸化還元触媒を利用した炭素-炭素結合切断に基づく新反応の開発
三井 惇央	極性不飽和化合物のシリルボリル化に基づく新規分子変換反応の開拓
宮本 祐輔	光エネルギーを利用した有機ホウ素アート錯体の直接励起による炭素ラジカル生成
逸見 拓矢	変異株に対する交叉中和活性向上を目的とした構造情報に基づく新規COVID-19ワクチン抗原の設計および評価
工藤 南加	指向性進化法によるグアニン四重鎖結合ペプチドの創製に関する研究
田中 和無為	RNA脱メチル化酵素に対する阻害剤と活性化剤に関する研究
中川 優奈	薬物キャリア応用に向けた細胞外小胞の送達効率向上に関する研究
赤坂 貴浩	アミロイドβオリゴマーを標的とした蛍光イメージングプローブの開発に関する研究
中井 郁那	逆相モノリス型シリカキャピラリーカラムを用いたショットガンプロテオーム計測法の高性能化に関する研究
西山 健太郎	抗原抗体複合体を反応場とした近接依存的な生体直交型反応の開発
周 慧華	Neuronal Circuits Underpinning the Central Circadian Clock: Anatomical and Functional Connection from the Dorsal to Ventral Subdivision in the Suprachiasmatic Nucleus (脳内中枢時計の神経サーキット:視交叉上核背側-腹側路の解剖学的機能的神経結合の同定)
浜田 悠貴	Mechanism of intracrine activity deterioration in meibomian gland dysfunction (マイボーム腺機能不全におけるイントラクライン活性低下の原因機構)
田崎 晃司	Molecular Basis of Ciliopathies Caused by Variants in the IFT Machinery and Mechanisms Underlying IFT Machinery Assembly (繊毛内タンパク質輸送(IFT)装置の遺伝子変異に起因する繊毛病の分子基盤とIFT装置の構築の分子機構)
山本 佳輝	BCAT1 regulates cancer progression and differentiation through enzymatic and non-enzymatic mechanisms in human chondrosarcoma (分岐鎖アミノ酸代謝酵素による酵素活性依存的・非依存的な軟骨肉腫制御機構の解明)
博士(薬学)	
川邊 隆彰	Phosphodiesterase 3 inhibitors boost bone outgrowth (ホスホジエステラーゼ3阻害薬は骨伸長を促進する)
澁井 紀宏	臨床ビッグデータ解析と薬理学的検証によるGLP-1受容体作動薬誘発悪心・嘔吐治療薬の導出
圓東 寛基	Sleep Architecture Alterations and Pharmacological Interventions in High-Dose Steroid Therapy: An Integrated Clinical and Experimental Study (高用量ステロイド療法における睡眠構造の変化と薬理学的介入:臨床および実験的手法を用いた統合的研究)
横井 茉里	免疫チェックポイント阻害薬誘発性肺障害の発症機序解明と重症化関連因子に関する研究
酒井 隆之介	Open-source automated imaging systems for spatiotemporal gene expression analysis during <i>Escherichia coli</i> colony biofilm development (大腸菌コロニーバイオフィルムの発達過程における時空間的遺伝子発現解析のためのオープンソース自動イメージングシステム)

会員だより

【第34回卒業生（1969年入学）同窓会】

2025年11月18日（火）、東京・「湊一や 日本橋八重洲店」にて、第34回卒業生（1969年入学）同窓会東京大会を開催いたしました。

1969年といえば東大入試が史上唯一中止となった年であり、関東出身者の多い学年であったと記憶しております。大学紛争の真っ只中を過ごし、卒業してから50年余り、久しぶりの東京での開催となりました。

2019年秋には京都で入学50周年記念大会が行われましたが、翌2020年に予定していた東京大会はコロナ禍により中止となり、今回は実に6年ぶりの再会となりました。参加者は2025年度中に全員が75歳の後期高齢者となる16名。昼間の移動が安心であることを考慮し12時30分からの開始といたしました。

出欠にかかわらず41名から「近況報告」を事前にお寄せいただき当日配布したことで話題は尽きず、予定の3時間はあっという間に過ぎ最終的には3時間半に及ぶ和やかな会となりました。長年海外在住の方々からも近況をいただき皆で懐かしく



拝読いたしました。

一方、前回以降4名の訃報に接することとなり胸の痛む思いもございましたが、参加者一同これからも元気に過ごし次回京都での再会を誓って散会いたしました。

幹事：中村・河村・野村（文責）

【第39回卒業生（1974年入学）同窓会】

「京都大学薬学部39期 古希の会」を開催して

令和7年（2025年）は、昭和53年に京都大学薬学部を卒業した39期生にとって、卒業後48年を迎え、多くの仲間が古希を迎える節目の年となりました。そこで、2年ごとに開催してきた同窓会を「京都大学薬学部39期 古希の会」と銘打ち、70歳の長寿を共に祝う会を開催しました。

令和7年9月28日（日）、懐かしい母校のキャンパスを訪れ、旧友との再会を喜び合いました。まず時計台を背景に集合写真を撮影し（写真）、引き続き百周年時計台記念館国際交流ホールで懇親会を開きました。それぞれが歩んできた道や近況を語り合い、旧交を温めるなか、70歳を迎えてなお精力的に活動する仲間の姿に驚くとともに、大いに元気をもらいました。懇親会後は、薬学部の格別のご厚意により、キャンパスツアーの機会に恵まれました。卒業以来48年ぶりに母校を訪れた人も少なくありません。私たちの学生時代には本館1棟だけでしたが、現在は総合研究棟や医薬系総合研究棟が加わり、当時とは見違えるほど広く立派になったキャンパスに、一同驚きと感慨を覚えました。研究施設に加え、実務実習室、薬草園、図書室も見学し、貴重な生薬の原木についてもご説明いただきました。なかでも、寛政7年に蔦屋重三郎が刊行した『一角纂考』の原本を拝見した際には、この年の大河ドラマの主人公ゆかりの資料とあって、大いに盛り上がりしました。

同期生80名のうち79名が健在で、そのうち37名が集いました。皆が生き生きとした表情で語り合う姿に、健康で再会できたことへの感謝をあらためて感じました。自由参加の二次会、

翌日の京都散策まで盛りだくさんの企画となり、参加者それぞれの記憶に残る「古希の会」になったと思います。これからも心身の健康を大切にしながら、旧交を温める機会を持ち続けたいと願っています。

最後に、共に幹事を務めてくださった廣田直美さん、同期生であり現役の京都大学理事でもある野崎治子さんのご支援に深く感謝いたします。また、薬学部見学の申し出を快くお受けくださった高倉喜信副学長、竹本佳司薬学研究科長のご厚意に御礼申し上げます。さらに、日曜日にもかかわらず薬学部をご案内いただいた服部明先生、喜多知子先生に心より感謝申し上げます。

文責 39期 谷川原 祐介（幹事）



【第 57 回卒業生（1992 年入学）同窓会】

日本薬学会第 146 年会の大阪開催に合わせ、1996 年卒業生の第 2 回同窓会を大阪・梅田にて開催いたしました。卒後 30 周年という大きな節目に加え、コロナ禍を経てようやく実現した再会ということもあり、年度末の多忙な時期ながら総勢 31 名が集う賑やかな会となりました。

当日は桜の開花も始まり、新たな出発を予感させる好天に恵まれました。在学中に阪神・淡路大震災を経験した私たちにとって、東日本大震災から 15 年という節目に再会できたことは、まさに一期一会の尊い機会となりました。薬学を志した者として、どのような分野であれ人々の「Well-being」に貢献する使命を改めて再認識する一日となりました。

宴席では、幹事の挨拶と乾杯ののち、大学時代の写真をみて懐かしんだり、近況報告が行われたりしました。「あれから 30 年!」、育児、介護、キャリアの変遷、新たな挑戦といったそれぞれの人生の軌跡に、会場の各所でお祝いの言葉や、共感と励ましの輪が広がりました。二次会まで交流は尽きず、名残惜しくも次なる再会を誓い合い、散会となりました。

未筆ながら、準備にあたり至らぬ点多々あったかと存じますが、当日の皆様の笑顔に免じてどうぞご容赦いただいて、還暦を前にした次なる機会にまた元気にお会いできることを楽しみにしております。

幹事：江本・迫田・櫻井・大野・木村（文責）



京都大学教育研究基金への寄附の御礼とお願い

薬学研究科長・学部長 山下富義

令和 7 年度、13 件総額 1,801,000 円のご寄付をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。この寄付金は、勉学・研究に励む薬学部学生ならびに薬学研究科大学院生を支援するために使用させていただきます。引き続き、京都大学薬学教育研究基金へご寄付を賜れましたら幸甚に存じます。

＜寄付者ご芳名（五十音順、敬称略）＞

首藤 英利、中島 英之（2 件）、縫田 優人、山内 脩、横山 巖 他 7 名

薬学教育研究基金

—「創薬と医療」を支える国際的な人材を育成し、世界最高水準の教育研究拠点を形成—

本基金は、国立大学を支える財政など環境が厳しくなる状況においても、世界に伍して活躍できる人材を育成し、世界トップレベルの研究成果を創出し続けるべく、2016（平成 28）年 12 月に設置しました。「創薬と医療」の国際的拠点にふさわしい人材育成と研究成果創出のための基盤形成に向け、教育環境（講義室や実験室などのインフラ）や研究設備・機器の整備、学生や若手研究者等の国際交流や研究の支援などに活用する予定です。

基金の用途

- ▷教育支援：教育環境の整備や学生の国際交流活動等の支援による人材育成の基盤整備事業
- ▷研究支援：世界最高水準の研究活動を支える基盤整備事業、若手研究者の研究支援事業等
- ▷社会貢献活動：地域社会との連携推進事業、薬物の適正使用に係る広報活動等による社会貢献事業

寄付の窓口

薬学教育研究基金ホームページ

<https://fund.kyoto-u.ac.jp/contribution/pharmaceutical/>

京都大学基金事務局

TEL：075-753-2210

※法人税法、所得税法による税制上の優遇措置（所得税控除・住民税控除・相続税控除など）が受けられます。

部 報

2026 年 薬友会役員

会長	山下 富義	薬学研究科長 数理治療薬学分野	総務 教養・会計	南條 毅 喜多 知子	薬品分子化学分野 数理治療薬学分野
副会長	竹本 佳司	前薬学研究科長	雑誌	秋葉 宏樹 小川 治夫	創薬有機化学分野 構造生物薬学分野
			運動	小形 公亮 中島 一磨	生体分子計測学分野 病態機能分析学分野

2025 年 会計報告・2026 年予算

収 入 (円)				支 出 (円)			
項目	2025 年予算	2025 年決算	2026 年予算	項目	2025 年予算	2025 年決算	2026 年予算
前年度繰越金	18,700,862	18,700,862	19,327,302	総務部	1,493,000	1,291,054	1,339,000
薬友会費	2,900,000	3,405,500	2,400,000	教養部	380,000	594,454	1,138,750
懇親会費	0	120,000	195,000	雑誌部	1,285,000	1,427,445	1,390,000
会誌広告料	445,000	430,000	430,000	運動部	65,000	80,890	74,000
雑収入	0	64,783	67,000	次年度繰越金	18,822,862	19,327,302	18,477,552
合計	22,045,862	22,721,145	22,419,302	合計	22,045,862	22,721,145	22,419,302

薬友会誌アーカイブ

<https://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/students-alumni/alumni/yakuyu/archive/>

53-76 号のパスワード 「yakarc」



編集後記



自分の都合で、先輩、同期に多大な苦勞を掛けました。本当に手助けしてくれた方々には感謝でいっぱいです。

ありがとうございました。

1 回生 張 博翔

先輩方の手助けのおかげで、なんとか完成までこぎつけることができ安心しています。協力してくださった先生方、先輩方、そして同期に心から感謝申し上げます。

1 回生 常松 鼓太郎



試薬を通じて社会貢献します

さまざまな分野の研究開発のニーズに
スピーディーにお応えします

3万品目を超える品揃え
1/3が独特の試薬
即日出荷



●有機合成試薬 ●材料科学研究用試薬
●ライフサイエンス研究用試薬 ●糖鎖研究用試薬 ●分析試薬

浅川 皓司(相談役)

浅川 直幸(代表取締役社長)

二階堂 誠理

西島 秀幸

第21回卒業生(新制第8回)

第43回新制大学院課程修了生

第58回新制大学院課程修了生

第62回新制大学院課程修了生

東京化成工業株式会社

www.TCIchemicals.com

GEN-SHO-HAKU

「玄（その道に熟達した玄人）となっても 尚 白（素人）である」

お客様を末永くサポートするためには、私たち自身も現状に満足せず、

自己研鑽を続けなければいけません。

創業者が社訓とした「玄尚白」の言葉を胸に、青山商事は、これからも、

より専門的で、きめ細やかなサービスをご提供いたします。

Products

販売品目

販売品目・取扱
メーカーの詳細は
こちらから



- 分析機器
- 物性・評価・計測機器
- 観察機器
- 環境計測機器
- 実験設備・機器
- 研究用消耗品
- 各種受託分析試験・カスタマイズ製品
- 移設業務・その他

青山商事 株式会社

本社 〒606-8354
京都市左京区二条通新聞之町西入頭町 333
TEL: 075-761-2161(代) FAX: 075-771-0190
滋賀営業所 〒520-3047
滋賀県栗東市手原 3 丁目 10-8
TEL: 077-552-7601(代) FAX: 077-552-7761



株式会社 京都サイエンス

本社 〒606-8354
京都市左京区二条通新聞之町西入頭町 333
TEL: 075-751-1101(代) FAX: 075-771-7675

aoyama-syouji.jp



SINCE 1954
AOYAMA
all about laboratory equipment

玄尚白

青山特許事務所

青山特許事務所は、あらゆる分野に精通した優秀な人材を多数配し、質・コスト等、あらゆる面において、知財財産権に関して最高水準のサービスを提供する専門家集団として、国内外のクライアントから厚い信頼を頂いております。

対象技術範囲

ビジネスモデル、機械、電気・電子、有機・無機化学、高分子化学、材料科学、バイオテクノロジー、医薬、メディカル、臨床診断技術、試薬、農薬、食品等を含むすべての技術分野

知的財産権関連業務

ライセンス契約、特許権譲受・譲渡契約、共同研究契約、共同開発契約など技術関連契約業務全般及びこれらに関するコンサルタント業務

業務内容

対象知的財産権

日本並びに外国における特許、実用新案、意匠及び商標

実体業務内容

鑑定、調査、出願から権利取得および権利の維持・権利行使に致すすべての業務
登録異議、訂正審判、無効審判その他の審判業務及び訴訟等のすべての争訟業務並びにこれらの業務に関するコンサルタント業務

共同代表 田村 啓
共同代表 山尾 憲人
東京オフィス所長 田村 聖子
所員数 約 300 名
(有資格者：弁理士 約 100 名)

大阪オフィス

〒530-0017
大阪市北区角田町 8 番 1 号
大阪梅田ツインタワーズ・ノース
電話 06-6316-1261 FAX 06-6316-2241

東京オフィス

〒105-0001
東京都港区虎ノ門 1 丁目 2 番 3 号
虎ノ門清和ビル
電話 03-6478-8647 FAX 03-6478-8675

URL <http://www.aoyamapat.gr.jp/>
E-mail info@aoyamapat.gr.jp



Pharmaceuticals Nutraceuticals

大塚製薬は、一人ひとりの可能性に向き合うトータルヘルスケアカンパニーです。

“Otsuka-people creating new products for better health worldwide” の企業理念のもと、未充足の医療ニーズに新たな価値を提供する医療関連事業と、科学的根拠をもった独創的な製品やサービスにより日々の健康維持・増進をサポートするニュートラシューティカルズ関連事業を通じて、人々のウェルビーイングの実現に向けて取り組んでいます。





研究機器 オンライン 受託 オンライン

実験フローガイド

実験の手法から観る実験フローバイブル。



ラボプランニング

研究ニーズにあった最先端のラボ環境を提案、開設、開発ニーズの必要な備品から機材までトータルサポート。

✓ 予算申請に便利!

✓ 指定範囲の金額で検索可能!

✓ 気になるワードで検索!

✓ 充実の製品情報は随時追加・更新!



研究機器 オンラインの特徴

- 性能比較表／キーワード検索が新たに追加! **NEW**
- キャンペーン・セミナー情報の確認も可能
- 研究用途に合わせた検索もラクラク!
- あのメーカーの製品をフリーワード検索やメーカーの絞り込み検索も可能!



受託 オンラインの特徴

- キャンペーン・セミナー情報の確認も可能
- 遺伝子発現解析や抗体作製から病理標本作製まで幅広い受託サービスを掲載!
- 研究用途から受託サービス検索
遺伝子工学、シーケンス解析、タンパク質工学などのカテゴリー検索!
- あのメーカーの受託サービスをフリーワード検索やメーカーの絞り込み検索も可能!



和研薬株式会社
WAKENYAKU CO., LTD.

和研薬の **研究機器 オンライン** **受託 オンライン** は、

PC、スマートフォンやタブレット端末からアクセス!

WEBサイト随時更新中 /
<https://www.wakenyaku.co.jp>



和研薬ホームページ



再生医療・細胞治療の研究開発に



特長

- シンプルな組成
- 静脈注射剤で実績のある成分から構成
- DMSOタイプ
- Xeno-Free製品
- ヒト造血幹細胞やヒト脂肪細胞由来幹細胞の凍結保存実績 (他の細胞株等の保存も可能)
- GMPに準拠した製造及び品質管理
- 無菌性を保証

STEM-CELLBANKER[®] EX GMP grade

ゼノジェンファーマ株式会社

福島県郡山市安積町笹川字平ノ上1-1
TEL 024-947-8500 (代表)

<https://www.zenogenpharma.com/>





病気になる。あるいは、健康への心配がある。

それだけで、人は日常から引き離されてしまう。

第一三共が掲げる「健康で豊かな生活」とはつまり、
すべての人が前向きに日々を生きられる、ということ。

わたしたちがサイエンス&テクノロジーで、
革新的モダリティ(治療手段)を追求するのも、そのためです。

健康につまずかない。そんなサステナブルな未来へ。

わたしたちは今日も、イノベーションの先にあるこたえをさがしています。

世界中の人々の健康で豊かな生活に貢献する

イノベーションに情熱を。
ひとに思いやりを。



Daiichi-Sankyo

第一三共株式会社

Immunohistochemistry
免疫組織染色

組織切片の作製から抗原の賦活化、ブロッキング、検出、封入までのプロトコルを掲載。

Cell Cultivation
細胞培養

培養からコンタミネーションの予防、細胞数の測定、凍結保存までのプロトコルを掲載。

Electrophoresis
電気泳動

核酸およびタンパク質の電気泳動について、ゲルの作製から染色までのプロトコルを掲載。

Western Blotting
ウェスタンブロッティング

転写からブロッキング、検出、ストリッピングまで、実験の流れに沿ってプロトコルを掲載。

よく解る 実験プロトコル

nacalai tesque 
The quality for certainty.

「解らない」が「解る」喜び。

ナカライテスクでは、実験方法・製品の使い分け・使用例・注意点・トラブルシューティングなどを合わせて掲載した4種類の「よく解る実験プロトコル」を用意しています。

無料でご請求いただけます！弊社 Web site からお申し込みください。／ <https://www.nacalai.co.jp/ss/Contact/JknProt.cfm>

ナカライテスク株式会社

〒604-0855 京都市中京区二条通烏丸西入東玉屋町 498

お問い合わせ

価格・納期のご照会

0120-489-552

製品に関するご照会

URL : <https://www.e-nacalai.jp/URL/?P=Contact>
TEL : 075-211-2703



がんと戦う人に
新たな選択肢と、
希望を。

がん免疫分野への挑戦。
それは、がんと戦う人に
新たな希望をもたらすために始まった。
そしてこの先も、私たちは止まらない。
次の希望をこの世に生み出す
その日のために。

**BREAK
THROUGH**

ONOは挑戦で、未来を変える

 小野薬品工業株式会社



Life forward

かけがえのない日常のために

ベーリンガーインゲルハイムは、株式を公開しない独立した企業として、約140年にわたり人と動物の健康に取り組んできました。これまで多様な分野で培った経験やパートナーシップを生かし、未来を見据えて研究開発に注力しています。

詳細はこちらをご覧ください

boehringer-ingenelheim.com/jp/



日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社

 **Boehringer
Ingelheim**



Together for a better healthcare journey

より良いヘルスケアジャーニーを、ともに。

シスメックスは、健康で長生きしたいという人々の普遍的な
願いに寄り添いながら、テクノロジーとソリューションで、
一人ひとりの生涯にわたるヘルスケアの旅路を見守り、支えています。

Healthcare
journey
movie

ヘルスケアジャーニーの
ムービーをご覧ください。



シスメックス株式会社

神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5番1号
www.sysmex.co.jp



ヘルスケアの革新を目指し 挑戦を続けます

シミックは、世界中の誰もがより健康で
その人らしい生活を送るため、ヘルスケアの革新に貢献します。
画期的なソリューションを通してヘルスケアに新たな価値を創造し、
必要とされる医療やケアシステムを1日でも早く届けます。

シミックグループ

〒105-0023 東京都港区芝浦 1-1-1 BLUE FRONT SHIBAURA TOWER 5
TEL : 03-6779-8000 (大代表)
Email : info@cmic.co.jp Web : www.cmicgroup.com



～ 現住所などに変更のあった方 ～

下記いずれかの方法で、薬友会事務局までご連絡ください。

- WEB サイト利用 URL: <https://forms.gle/5UwfCqboiJe6SfSx8>
- E-Mail 利用 yakuyu@pharm.kyoto-u.ac.jp
- FAX 利用 No. 075-753-4589



2026 年 9 月発刊

発 行 者 京大薬友会

〒 606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46-29 京都大学薬学部内

TEL & FAX : 075-753-4589

E-Mail : yakuyu@pharm.kyoto-u.ac.jp

発行責任者 薬友会会長 山下富義

印 刷 中西印刷株式会社